真田町文化財調査報告書

山本畑遺跡緊急発掘調査報告

—長野県小県郡真田町菅平—

1977

真田町教育委員会

序

今日では、菅平といえば高原清浄野菜の生産地であり、日本のダボスとして知られるスキー場であり、東京諸大学の校外運動場でもあるが、なんといっても本領は雄大な眺めを持つ高原といえるのであろう。

この天の恩恵豊かな菅平高原を我々の先人はいつ頃から、如何様に活用してきたであろうか、との究明は長い間の課題であった。

この度の「山本畑遺跡緊急発掘調査報告」は、偶然の機会からではあったが、こうした願いを持った人達の善意に依って、緊急に発掘調査された報告書である。即ち、菅平区中組の山本袈裟明氏の住宅増築に伴う基礎工事の際、地下約50～60cmの作業に及んだ所、突然須恵器甕及び土師器破片等が出土したため、工事を中止してその調査究明を菅平小・中学校へ依頼した事に基づくものである。

また、第2次発掘は、隣接畑の所有者山本敦吉氏の好意に依って発掘がなされたものである。この際、学校も斯る考古学に関心深く研究されてきた坂口、小原、飯島教諭を始め、事の大切さをよく認識され、学校職員、生徒の全面的協力体勢を整えて協力された大河内校長の熱意にも依るものである。

一昨年、真田四百年祭を挙行した際、記念講演を県史編纂主任黒坂周平氏に依頼し、「真田氏の発祥について」を聴講したのであるが、氏は従来の海野氏系真田説に対し、その発祥は古く、上田に国府、国分寺の建設された頃、この菅平、田代一帯の草原を牧場とし、その牧監として勢力を得たのが古い真田氏ではないか、との説を発表された。これは信濃史学会長一志茂樹氏の説でもあるとの事であった。したがって、この発掘調査には大きな期待が寄せられた。

昭和51年9月中旬に一志茂樹氏をわずらはして真田地区の史跡調査をお願いしたのであるが、氏もこの調査の中間報告に非常に強い関心を寄せられた。

この度の発掘調査は、菅平の古代史解明の端緒になるものであり、引いては真田氏発祥の解明にもつながるもので、その発見の時期からも「啐啄同機」ともいい、得て喜びとするところである。

終りに、直接発掘に協力願った山本袈裟明氏、山本敦吉氏の協力に感謝すると共に、暑い時、寒い時期、進んで協力された菅平区、学校、さらには御指導くださった黒坂周平氏、桐原 健氏、川上 元氏及びこの発掘から報告書作成まで一貫して労をとられた坂口益次氏等の方々に厚く御礼申しあげて、発刊の序としたい。

昭和52年3月30日

真田町教育長　清　水　憲　雄

例　言

1．本書は長野県小県郡真田町大字長1,234番地（菅平中組）山本袈裟明氏住宅の増築工事において発見された遺跡とそれに隣接する山本敦吉氏畑遺跡の緊急発掘調査報告である。

2．発掘調査は真田町教育委員会が実施したもので、菅平小中学校が中心となり行ったものである。第1次発掘は昭和51年7月21日から23日、第2次発掘は10月13日から11月2日にわたり行った。発掘作業は菅平中学校の生徒が野外学習として授業、クラブ活動の一環の中で行われ、特に郷土史、理科クラブ員は熱心にとりくんだ。

3．遺物の整理は菅平小学校の小原等、飯島繁夫、坂口益次らが中心となり郷土史、理科クラブ員の協力を得て昭和51年7月23日から11月10日まで行った。また遺物の実測は林和男が担当した。

4．発掘調査は土地所有者の山本袈裟明、山本敦吉両氏の学術研究への深いご理解により実施できたものである。また信濃史学会長一志茂樹氏、県史編纂主任黒坂周平氏のご指導ご教示を得た。

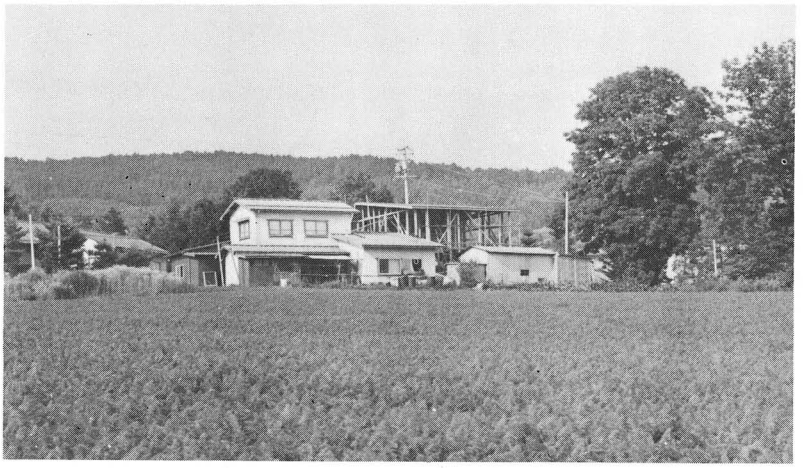
5．本書の執筆は各調査員の共同討議検討の上で、各項目別に担当しその文責を文末に明記した。

6．本書の編集は、川上元、坂口益次が真田町教育委員会と連絡をとりながら行った。

7．発掘調査の遺物は真田町教育委員会の管理のもとに、菅平自然館に展示保管する。

目　次

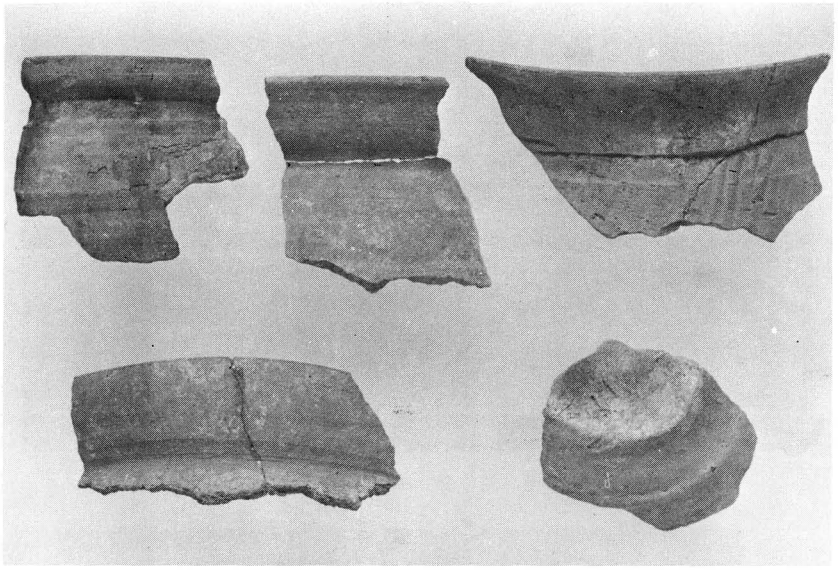
序
Ⅰ　遺跡の位置と環境……1
　1　位　置……1
　2　気　候……1
　3　地理的環境……2
　4　歴史的環境……2
Ⅱ　発掘調査の経過……4
　1　調査に至る経過……4
　2　調査団の編成……5
　3　調査日誌……5
Ⅲ　遺構と出土遺物……7
　1　第1号住居址……7
　2　第1号住居址出土遺物……9
　3　第2号住居址……12
　4　第2号住居址出土遺物……13
Ⅳ　遺構と遺物の検討……16
　1　住 居 址……16
　2　出土遺物……16
Ⅴ　総　　括……18
あとがき



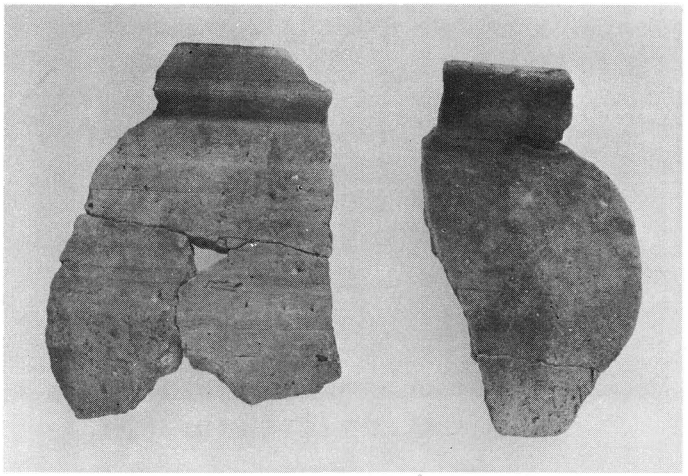
遺　跡　全　景　（南より）

土師器出土状況（第１号住居址）

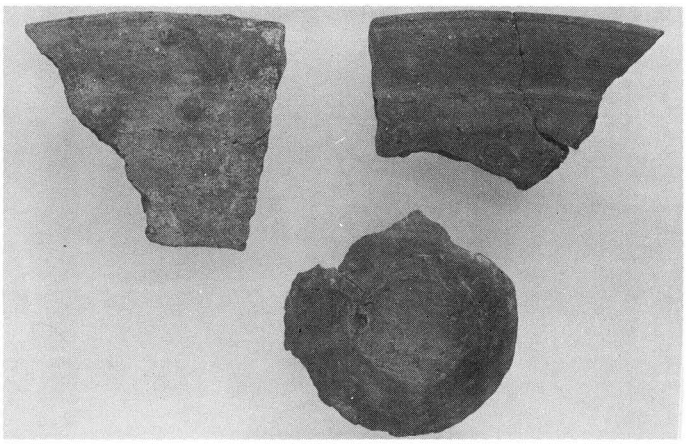
灰釉陶器出土状況（第１号住居址）



土師器　甕

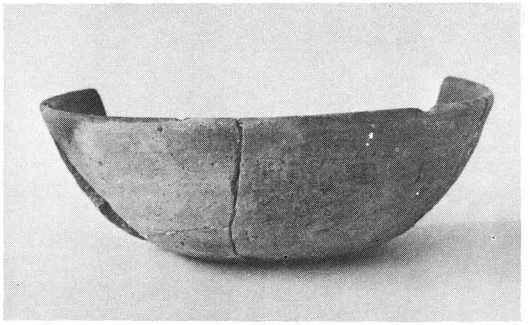


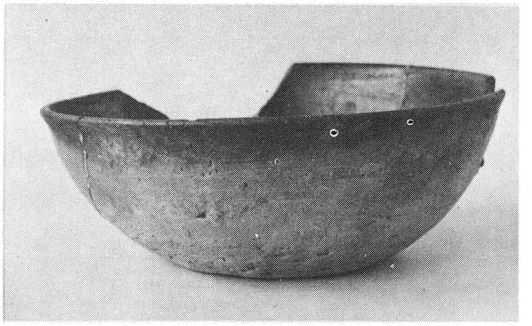
同上



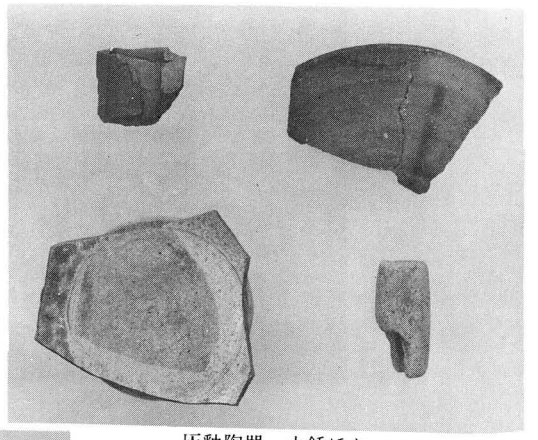
同上

第1号住居址出土遺物

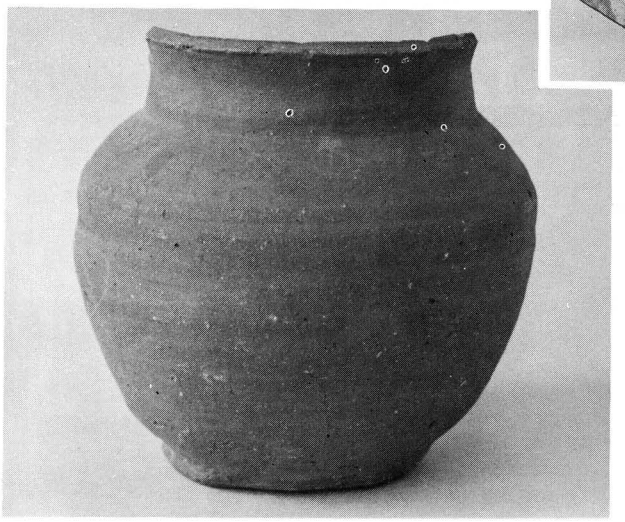




▲ 土師器　坏



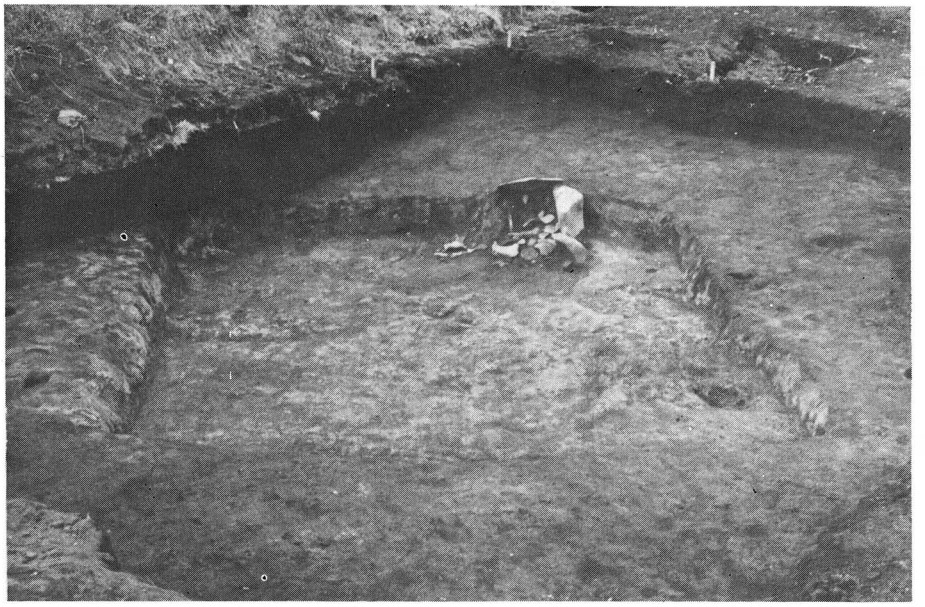
灰釉陶器、土錘ほか



◀ 須恵器　壺

第１号住居址出土遺物

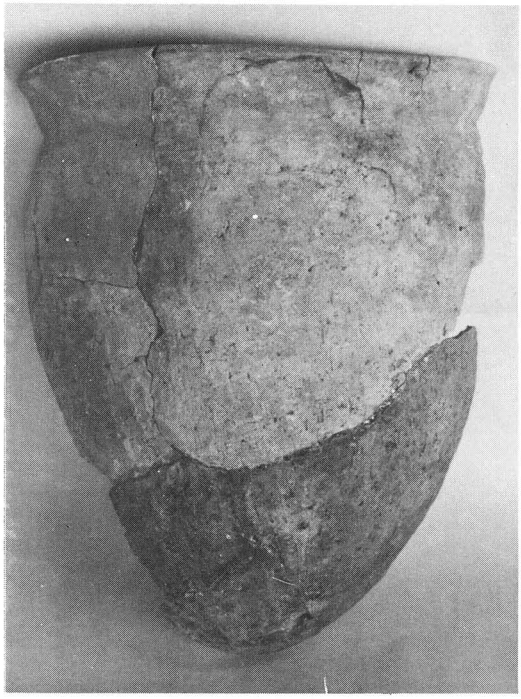
図版四　山本畑遺跡

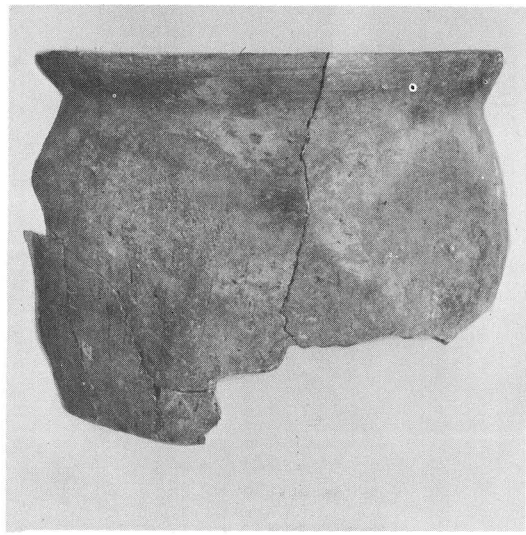


第２号住居址（西より）

同上　カ　マ　ド

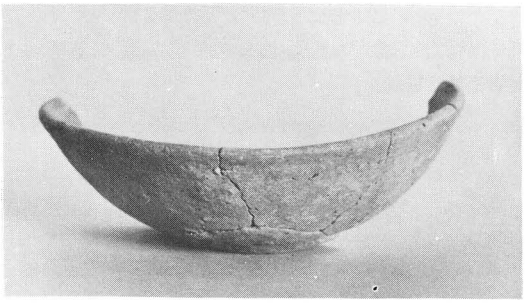
同上　耳皿出土状況

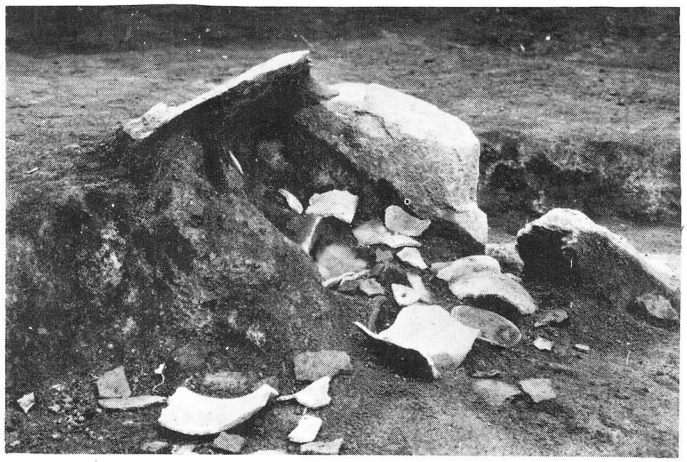




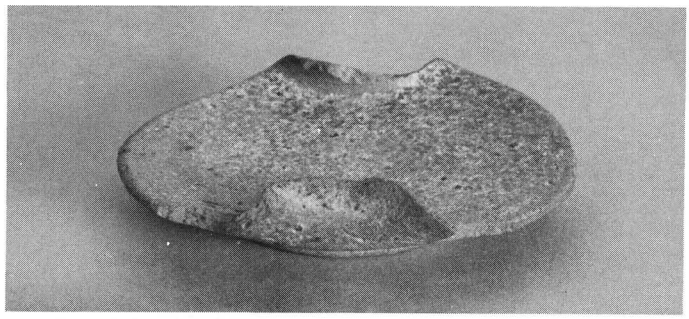
土師器　甕

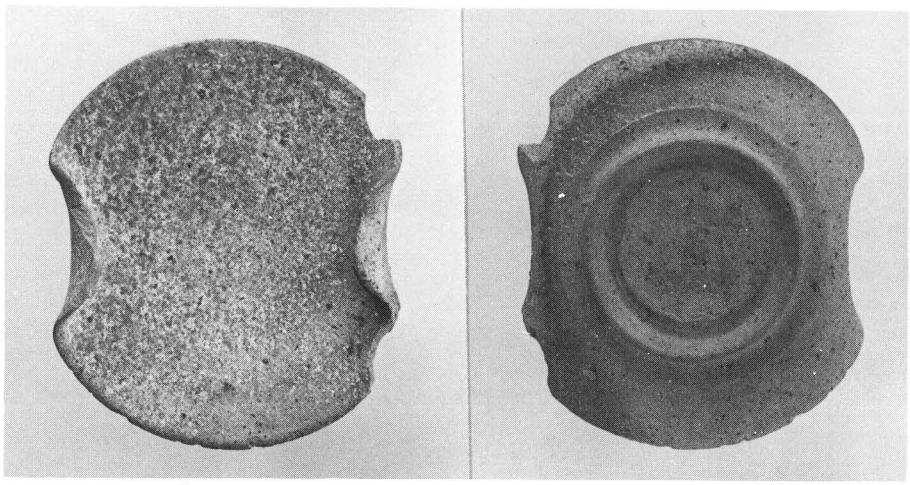
土師器　坏



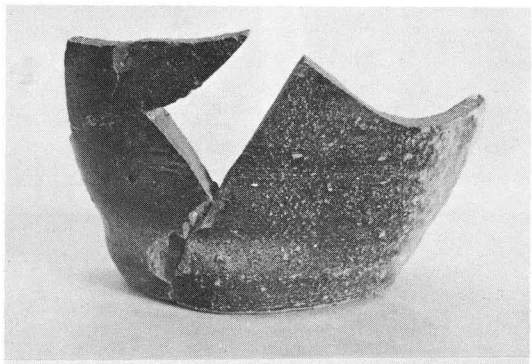


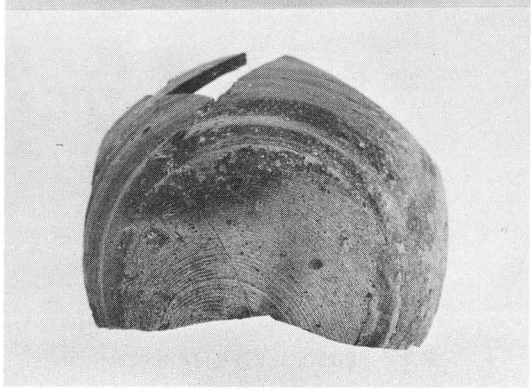
第２号住居址出土遺物及び出土状況





須恵器　耳皿（第2号住居址）





須恵器　壺
（第2号住居址覆土中）

菅平高原山本畑遺跡緊急発掘調査報告

川上 元・坂口益次・小原 等
飯島繁夫・林 和男

Ⅰ 遺跡の位置と環境

1. 位 置

山本畑遺跡は、長野県小県郡真田町大字長1,234番地(菅平中組)に所在する。

菅平は上田盆地の東北部に位置し、標高1,200～1,500ｍの高原地帯で、冬期のスキー場として、また夏のキャンプ・ハイキング地として近年にぎわいをみせている。

本遺跡の所在する地点は、菅平高原中央部の平坦面にあたり、標高1,240ｍを計る。北側に山を背負い、その南は湿原に面し、さらに東側には湿原に注ぐ豊富な湧水が流れ、日あたり、水の便がよいといえる。また、厳冬期においても本地点は菅平の中で最も気候条件がよく、南面した小盆地の中心といえる場所である。

現在、本遺跡の南側は湿原に続くなだらかな畑地となっているし、その北側には保科に通じる道路（旧保科道）が東西にのびている。（坂口益次）

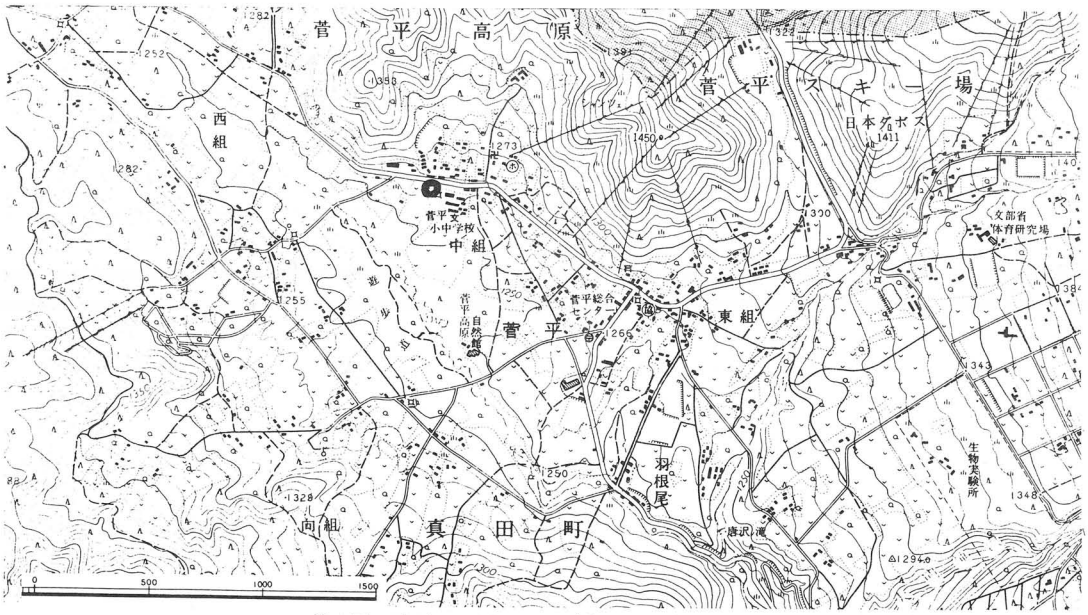
2. 気 候

集落のある菅平の気候は、1月の平均気温が－5.5℃、8月の平均気温は20℃で温帯山地気候を呈し、夏は冷涼で冬は寒気が厳しく1年を通じ昼夜の気温の差が著しい。

わが国の最北端の稚内の1月の平均気温は－5.8℃、8月の平均気温は19.2℃であるので、冬は稚内とほぼ等しく、夏は札幌、旭川より冷涼である。盆地状に形成された菅平高原の気候は低緯度でありながら北海道なみで、動物相、植物相は北海道と似ている。

菅平の最高極値は30.5℃（昭和47年7月3日）、最低気温の極値は－28.5℃（昭和51年12月30日）で、冬期において－20℃以下になることは珍らしくない。

雨量は年間1,407㎜で、上田の915㎜より多い。初雪は11月4日、終雪は4月14日となっている。



第1図 遺跡の位置図 （○印 山本畑遺跡）

積雪は最深155cm（昭和43年２月17日）で平均100cm内外で根雪期間は普通12月上旬より４月上旬までである。霜は６月上旬の終霜、９月上旬の初雪は戦後のみでも数回あり、昭和５年８月27日に中央湿地帯の畑に局部的に初霜がおりたことがある。霜の心配のない月は７月だけと昔から言われている。（坂口益次）

表１　菅平高原の気候気（長野地方気象台・菅平観測所、昭和43～50年統計、平年の数値は昭和11年11月１日菅平観測所開設以後の統計）

項目＼月		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年	平年
平均気温(℃) 平内気温(℃)		−6.0	−5.7	−2.9	5.7	10.5	14.2	18.7	20.0	15.3	8.2	2.7	−3.3	6.5	6.6
最高気温の平均(℃)		0.1	0.2	3.1	11.8	16.8	19.4	23.7	25.0	20.0	15.9	8.2	2.5	12.0	11.6
最低気温の平均(℃)		−12.0	−11.4	−9.0	−0.7	4.1	8.9	13.6	14.1	10.6	2.9	−2.7	−9.0	0.8	1.5
気温の季節	真夏日	−	−	−	−	−	−	0.2	0.5	−	−	−	−	0.7	
	夏日	−	−	−	−	0.7	0.3	14	20	4	−	−	−	39	
	冬日	31	28	29	14	4	−	−	−	−	8	23	31	168	
	真冬日	15	16	9	0.2	−	−	−	−	−	−	1	10	51	
降水量(mm)		91	104	78	84	100	174	180	140	169	94	75	75	1364	1244

年度別極値

項目＼年	43	44	45	46	47	48	49	50	平均
最高気温の極(℃) 起日　月／日	27.9 7/19	28.0 8/20	28.8 7/22	28.5 8/ 7	30.5 8/ 3	30.0 7/13	27.6 8/21	29.2 8/ 1	28.8
最低気温の極(℃) 起日　月／日	−18.6 2/18	−23.4 1/14	−24.0 1/17	−21.5 1/10	−19.5 2/ 8	−24.5 12/18	−22.6 1/ 2	−24.8 1/31	−22.4
最深積雪量(cm) 起日　月／日	155 2/17	75 3/13	7.0 2/11	78 2/10	76 2/14	98 1/13	113 2/12	93 2/24	95
新積雪最深(cm) 起日　月／日	45 2/15	35 4/16	25 3/16.11.29	17 1/ 4	32 12/23	44 1/11	18 11/18	18 2/ 4	29
日降水量の極(mm) 起日　月／日	49 8/21	65 7/27	53 6/14	69 9/ 6	86 9/16	47 1/11	52 919	60 7/12	60

3．地理的環境

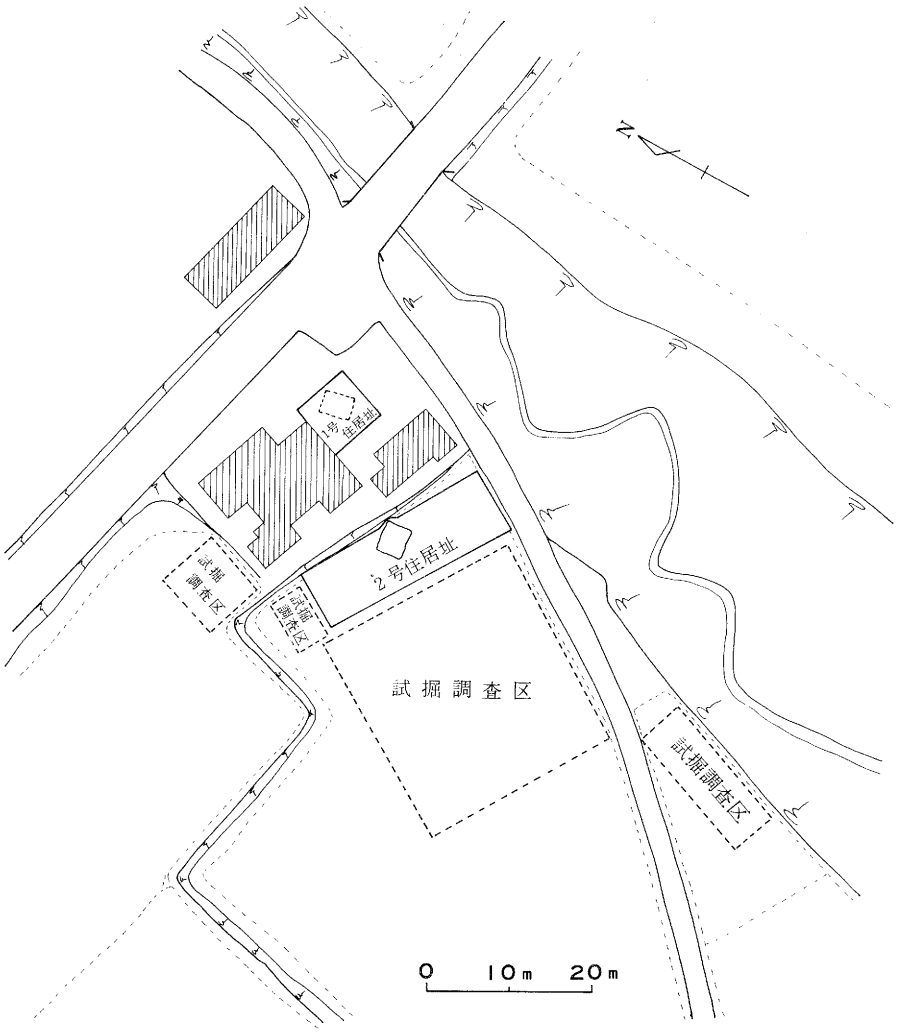
菅平高原は本州のほぼ中央部（北緯36°31′1″、東緯138°21′10″）、四阿山（2,333ｍ）、根子岳(2,195ｍ)の南西６kmにわたって広がる裾野と、その裾野に続く南西４kmにわたる標高1,220ｍの湿原を囲む小盆地より成り立っている。その裾野には東から滝の入沢、中之沢、大明神沢、唐沢の４つの沢があり、その沢から流れる川と湿原から流れでる大川とは菅平口で合流して神川となり南に流れ千曲川に注いでいる。

菅平を地形的に分けると、山岳地帯、裾野地帯（十ノ原）、沼地帯（沼平）の３つになり、集落は沼地帯に密集している。その沼地の小盆地北端は仁礼峠、西端は保科峠があり、長野盆地に向って大きく浸食されている。この沼地帯からなる小盆地は南に大松山（1,649ｍ）、北に太郎山（1,529ｍ）とその連山、西に保基谷岳（1,529ｍ）に囲まれ東に開けている。その囲辺は東組、中組、西組、向組の各集落に分けられ、湧水にそって集落が発達している。（坂口益次）

4．歴史的環境

菅平の名称のおこりは定かでないが、江戸時代中期の「宝永の差出帳」によると、〝中央に沼があり、ヨシや菅の密生している所〟と記されている。かっては、この一帯を「沼平」と呼んでいたことが記録にみえるのであるが、こうした植物が平坦部の湿原を中心として茂っていたことから、いつしか「菅平」と呼ばれるようになったものと思われる。

この地の開発の歴史は古く、すでに近世初期に松代藩士が開墾のために入山しているし、さらに大笹街道の開通に伴い囲辺の交通路が発達するにつれて、上田藩や上田の商人などが菅平の開墾に入山している。



第2図　山本畑遺跡 地形図　（1：900）

しかし、いずれも自然条件の悪さのため中断されている。その後、弘化4年（1847）善光寺大地震で川中島一帯が大洪水を受けた際、難をのがれた人々がここに入植したが、これが現在の集落のおこりだといわれている。

ところで、それ以前の菅平の考古学的遺跡を概観してみると、ここには旧石器時代から縄文・弥生時代を経て奈良・平安時代にわたる長い期間の人々の生活の痕跡を伺うことができるのである。現在までに、この一帯から約100ヵ所を上回る遺跡・遺物の確認がなされ、その研究も進んでいる。これらの遺跡・遺物は各時代を通じて一様に分布しているが、とくに高原の中心をなす平坦面の温原地帯周辺、沢すじの洞穴・岩陰あるいは湧水地点等に多くみられる。

菅平高原におけるこれら遺跡のあり方は、とくに旧石器時代から縄文時代中期までのものが圧倒的に多く、中でも縄文早期文化の占める比重が大きいといえる。しかし、後続する弥生時代から古墳時代にかけての遺跡数は極端に減少して、高原に分布する全遺跡の10パーセント以下を占めるにすぎない現象を呈し、しかも遺跡自体の規模も小さくなる傾向を示す。したがって、この時期は通常の生活跡としてより、むしろ季節的な短期間のキャンプ跡的性格の強い遺跡かとも思われる。

上田盆地における弥生期の一般的すう勢としては高地から低地への移動が、その遺跡分布によって把握

されているが、昭和38年、41年に実施された菅平唐沢岩陰遺跡および陣の岩岩陰遺跡発掘調査では、岩陰内から検出された全遺物数に対して、弥生後期の資料が圧倒的に多い事例をあげ、弥生後期の人口増大とその時期に狩猟を専業とした山の民の存在を想定していることは興味あることである。

後続する古墳時代および奈良・平安時代の様相も、菅平高原においてはいまだ明確には把握されていない実情である。しかし、この期でとくにあげておかねばならない問題として、平安期以降における水分の神をまつる四阿山（白山）信仰の成立と交通路の整備がある。白山信仰は、四阿山における山岳信仰がいつの頃か、加賀白山の信仰と結びつき、神川水系をはじめ善光寺平から上州までに、その信仰を発展させていったのであった。それと共に奥信濃から菅平高原を貫いて上州に達する古道、あるいは上田盆地と上州を結ぶ古道がひらけたものと思われる。古代から中世にかけての交通路はさだかでないが、前述したような観点で菅平は交通上の重要地点であったと思われるのである。

なお、近世以降菅平周辺を通る交通路は以下のものが知られている。

①大笹街道　仁礼から大谷不動を経て、日本ダボスの東側を下り明神沢に至り、中ノ沢を渡り、十ノ原を横切り渋沢から鳥居峠を越えて大笹に通ずる道。

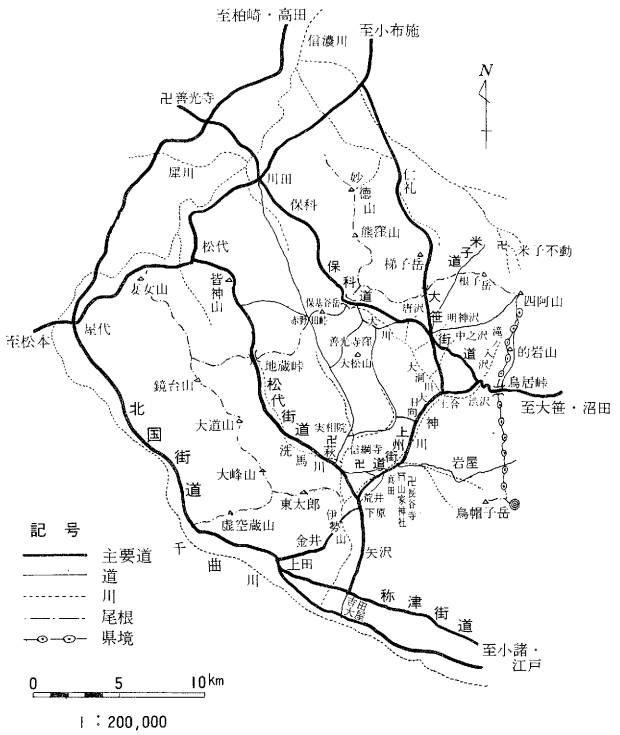
②保科道（鎌倉街道）　大笹街道の明神沢から西にわかれ、唐沢川を渡り、菅平湿原の北側を通り保科峠を経て保科、川中島平に通ずる道。

③松代道（（善光寺道または江戸道、北国裏街道）　善光寺平から松代を経て地蔵峠を越え、傍陽を通り荒井、矢沢、小諸を経て江戸に通ずる道。

④上州街道　真田の横断道としての大笹・松代街道に対して、これに縦貫するのが上州街道である。上田から神川を渡り下原に至り、荒井で松代道と直交し、真田、大日向を北上して菅平口（土合）から渋沢に至り大笹街道と交わる道。

⑤菅平口（土合）～明神沢への道（米子道）　大日向より菅平へ通じる道。菅平口から松の木沢、栗の木沢を経て中の沢を渡り、明神沢に至り大笹街道と交わる道。

⑥傍陽～菅平への道　傍陽から菅平へ通じる道は、松代道からわかれ傍陽の実相院の前を通り、横道で洗馬川に沿って沼入を経て善光寺峯を越えて菅平に入る道。　（川上　元）



第3図　真田町の古道概略図

II 発掘調査の経過

1. 調査に至る経過

本遺跡は長野県小県郡真田町大字長1234番地（菅平中組）山本袈裟明氏住宅の増築工事において発見された遺跡である。

昭和51年7月11日基礎工事の際に、小形の

須恵器甕と土師器破片および焼けた石が発見されたことを菅平小中学校に届けられたため、学校では急拠専門家の指導をあおぐと共に町教委へ調査の依頼をした。町教委ではさっそく、県教委文化課に連絡し発掘届を提出して今回の発掘調査となったものである。第1次調査は7月20日から7月23日まで行った。発掘調査にあたっては、すでにブロック壁が完成していたのでグリッド設定は無理であったため遺物の集中個所を中心に遺構の拡張を計った。1グリッドの区画は、1.8m×3.6mである。調査面積は4グリッドで、ほぼ24㎡である。

第2次発掘は、山本袈裟明氏住宅（1号住居址）に隣接する山本敦吉氏畑からも以前に多くの土器が出土したと云うので農作物の収穫が終るのを待って10月13日から11月2日にわたり実施した。

発掘調査にあたっては、グリッド発掘法をとり、2m×2mの区画を1グリッドとした。遺構を探すために25グリッド、4トレンチ区を設定し、25グリッド100㎡を調査した。（坂口益次）

2. 調査団の編成

調査主体　真田町教育委員会

調査団

調査担当者　川上元（日本考古学協会員・真田町文化財調査委員）

調査員　坂口益次（菅平中学校教諭）

〃　小原等（菅平小学校教諭）

〃　飯島繁夫（〃）

〃　林和男（長野県考古学会員）

〃　桐原健（日本考古学協会員）

調査協力者　菅平小中学校郷土史クラブ員・同理科クラブ員

事務局　真田町教育委員会　坂口芳雄、堀内精次　（事務局）

3. 調査日誌

第1次発掘調査

7月11日(日)

基礎工事において遺物発見。

7月12日(月)

山本氏より菅平小中学校へ遺物発見の連絡。

7月13日(火)

工事現場下見。小学校郷土史クラブで基礎工事の溝の断面地層実測。

7月14日～16日

ブロック積み

7月20日(火)

ブロック積みの固まるのを待って、現場を下見して4グリッド設定。

7月21日(水)

発掘調査開始。A、Bの2グリッドを20cmの深さまで掘りさげる。—40cmまでは、菅平特有の黒土だけで何も検出されなかった。深さ60cm近くの赤土層の境目で、Bグリッドにおいて、土師器、須恵器を検出した。

夕方、塩田城跡発掘中の黒坂周平氏、川上元氏がみえ今後の調査の打ち合わせをした。

7月22日(木)

塩田城跡発掘現場より桐原健氏を派遣してもらいC、Dグリッドの発掘をすすめた。Cグリッドには何も検出されず、Dグリッドから土師器の破片と灰釉陶器の破片を検出しただけに終る。

午後、住居址（第１号）の実測をすませ、発掘調査作業をうちきる。夕方、中学生の手により埋戻し作業を行う。

７月23日㈮

教育委員会により、昨日の続きの埋戻し作業を実施し第１次緊急調査を終了する。

第２次発掘調査

10月13日㈬快晴

放課後グリッド設定を行い、グリッドＢ－４、７、８を20cmの深さまで掘り下げる。

10月16日㈯曇り

５時間目中学２年生発掘に参加。グリッドＢ－４、６、７、８、10、12、13、Ｃ－２、６、８の10ヶ所にトレンチをいれる。放課後はクラブ員が続いて作業をすすめる。夕方うす暗くなる頃に赤土５cmぐらい上部で土師器数点を発見する。

10月17日㈰快晴

午後クラブ員を中心としてグリッドＢ－６、７、８、Ｃ－７、Ｄ－７を掘り下げ住居址（第２号）の南壁、東壁、西壁の一部を確認する。

10月20日㈬

川上元氏来校。現場視察と今後の打ち合せ。

10月21日㈭晴れ

午後２時より菅平議会（30名）研修。第１次発掘のスライドと菅平の歴史について説明。又、２次発掘の現場説明。発掘への理解と協力をみる。午後よりクラブ員によって発掘をすすめる。グリッドＢ－６、８、Ｃ－６、７、８のⅠ、Ⅱ、Ⅲ層まで掘り下げる。

10月22日㈮快晴

グリッドＡ－６、７、８、Ｂ－５、Ｃ－５、６のⅠⅡ層をはぐ。

10月23日㈯晴れ

午後からグリッドＡ－５、６、７、８、Ｂ－５、６、８、Ｃ－５、６、７、８のⅡ、Ⅲ層まで掘り下げる。４時頃から川上、林両氏がみえ住居址プラシの確認に入る。作業がすすむにつれて、正方形に近いものがうきだしてくる。住居址のプランが確認できたので住居址内のグリッドＢ－６、７、Ｃ－７、Ａ－８を床面まで掘りさげる。住居址西側には遺物が少ない。

10月24日㈰曇り

午前中グリッドＡ－６、７、８を床面まで掘る。住居址の北東部の壁で須恵器の耳皿が出土する。耳皿の底に墨書文字を確認する。土師器の甕の破片、内黒杯等が出土しはじめる。遺物はカマドの周辺に一番多かった。

第４図　発掘調査風景

10月29日㈮晴れ

風が冷たく雪が舞う。放課後発掘区Ａ、Ｂ、Ｃ、Ｄにトレンチを入れて第２号住居址周辺の調査を実施する。数10ヶ所にわたり掘ったが赤土層のおちこみは確認できなかった。

10月30日㈯

午後、第２号住居址の実測を行う。

10月31日㈰曇りのち雹を伴うにわか雨

住居址の断面の実測。クラブ員はグリッドＤ－５、６、７、８を赤土まで掘り下げる作業。結局住居址内、外に

も柱穴は確認できなかった。

11月１日(月)晴れ

しみあがった土を取り、住居址の写真撮影。中学1、2年生のクラブ員でA－９、B－９、C－９、D－９のグリッドを拡張したが何もなかった。

11月２日(火)晴れ

カマドの図面をとったり、地形測量をして一切の発掘作業を終了す。その後、菅平区長の金井三吉氏の大型トラクターで埋土作業に入り、夕方には畑を完全に復元し、山本畑遺跡の発掘調査を完了する。

（坂口益次）

III 遺構と出土遺物

菅平高原一帯は浅間山の墳火による特有な火山灰土からなりたっている。

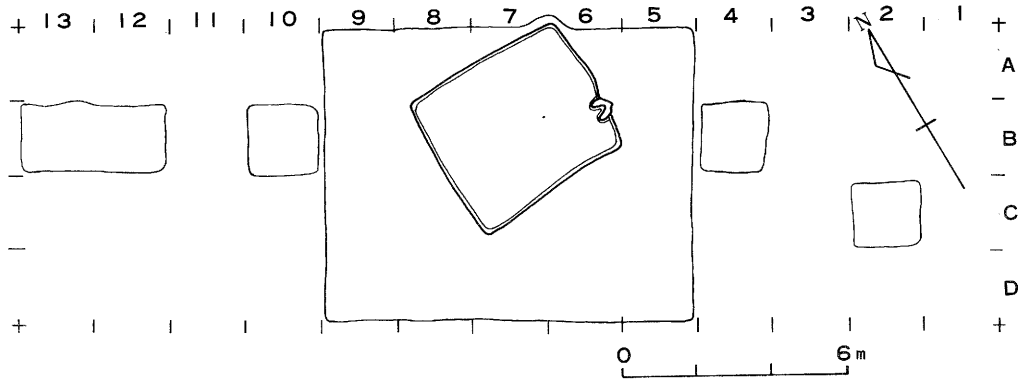
本遺跡は昭和初期以前には桑畑として、現在は高原野菜の畑としてかなり昔から耕作地として利用されてきた。そのため表面は桑の根により、あるいは大型トラックターなどによって攪乱は受けてはいるが、それもせいぜい表土下30～40cmまでであり、黒色土層の堆積が60～70cmほどの厚さをもっているため遺構自体への攪乱は少ないとみられる。

A－５～A－９区にかかるトレンチの北側壁の地層をみると、Ⅰ層（表土）20～30cm、Ⅱ層（黒色土層）10～15cm、Ⅲ層（黒褐色土層）５～10cm、Ⅳ層（ローム混じりの黒褐土層）、Ⅴ層以下（ローム層）地山土と区分でき（６図）、他の地点においてもその層位は変わらなかった。

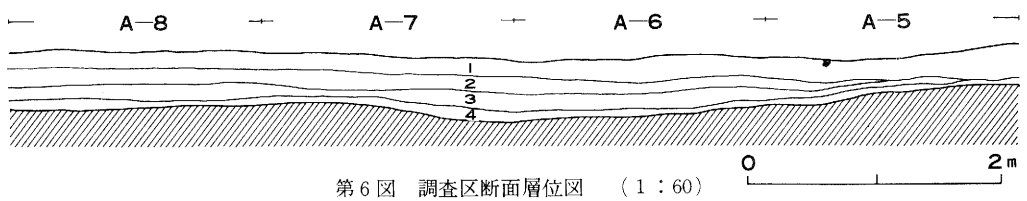
遺物は各層全般にわたって出土しているが、Ⅰ、Ⅱ層からはまれで、３層以下に集中している。

1．第１号住居址（第７図）

住宅増築の工事の時、整地をおこない、基礎工事をおこなった際に発見された住居址である。そのため



第５図　グリッド配置図　（１：200）



第６図　調査区断面層位図　（１：60）

調査がおこなわれたのはすでにコンクリートブロックによる基礎工事も終了し、また、スケールボイルも数本打ち込まれていたために攪乱が住居址全体に及び、北壁と東壁の一部が検出されたにすぎなかった。

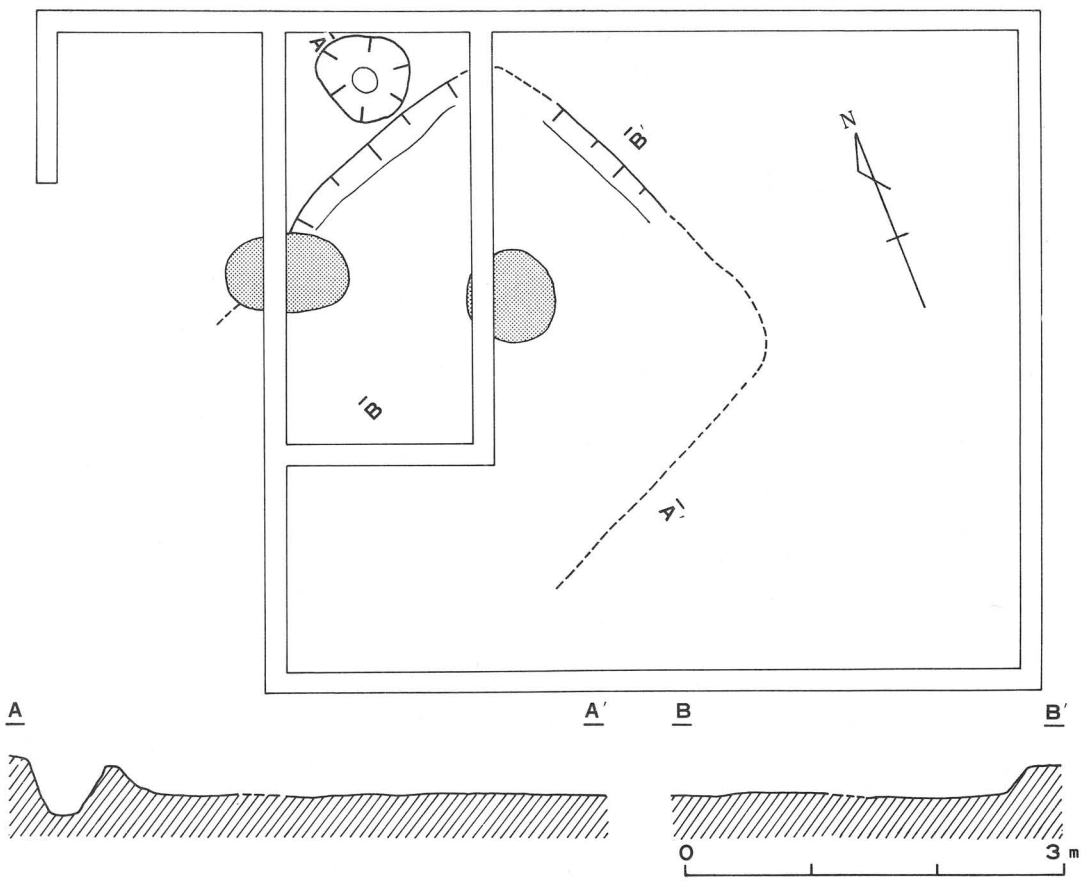
平面形、規模等は北壁で185cm、東壁で120cmが検出できたにすぎず全体を知り得ることはできなかった。南壁は調査の過程において、北壁から350cmほどのところに地層の変化によってあるていどは推定されたがそれと断定するまでには至らなかった。しかし、第2号住居址とは規模において大差があるとは考えられず、東西350cm×南北400cmを推定する。主軸方向をN－23°－Wにもつ方形の住居址と考えられる。

壁は北壁で20cm、東壁で22cmほどローム層を切り込んで作られている。傾斜は50°ほどの角度をもつゆるやかなもので、壁は軟弱であった。

床面はローム土を踏みかためて作られているが軟弱で凹凸がはげしい。北壁に沿って溝状の凹みも推定されたが確認にはいたらず、東壁の中央付近にも焼土をともなうピット状のものがみられたがこれも攪乱によって検出は不可能であった。住居址中央部東寄りの床面の一部が径70cmほどの円形に焼けており、木炭をともなう焼面となっている。柱穴等は検出できなかった。

カマドは北壁中央西寄りに推定された。攪乱を受けてはいたが100cm×60cmの範囲に焼土が検出され、基礎工事の際にもこの地点において焼土とともに60cm×50cmほどの四角錐の石が25cm大の数個の石といっしょに出土しており、そのいずれもが火を受けて焼けているため第2号住居址と同じく石を粘土でおおったカマドであったと考えられる。

遺物はすべてカマド周辺から出土している。なお、北壁の外に径70cm、深さ80cmをもつピットが検出されたが、住居址との関係はつかめなかった。（小原　等）



第7図　第1号住居址実測図　（1：60）

2．第1号住居址出土遺物（第8・9図）

ほとんどの出土遺物が床面直上より若干浮いた状態で出土している。完形土器の一群はカマド周辺から東壁方向に一列に検出された。また、床面直上から土錘、長頸瓶の破片各1点が出土した。

本住居址から出土した遺物は、灰釉堆形陶器、土師器堆、土師器甕、甑形土器、須恵器壺、須恵器堆、土錘および獣骨が出土している。

遺構全体を被う攪乱にもかかわらず、遺物量としては豊富で一軒の生活器具を知るうえで興味がもたれる。

甕形土器（1～6）

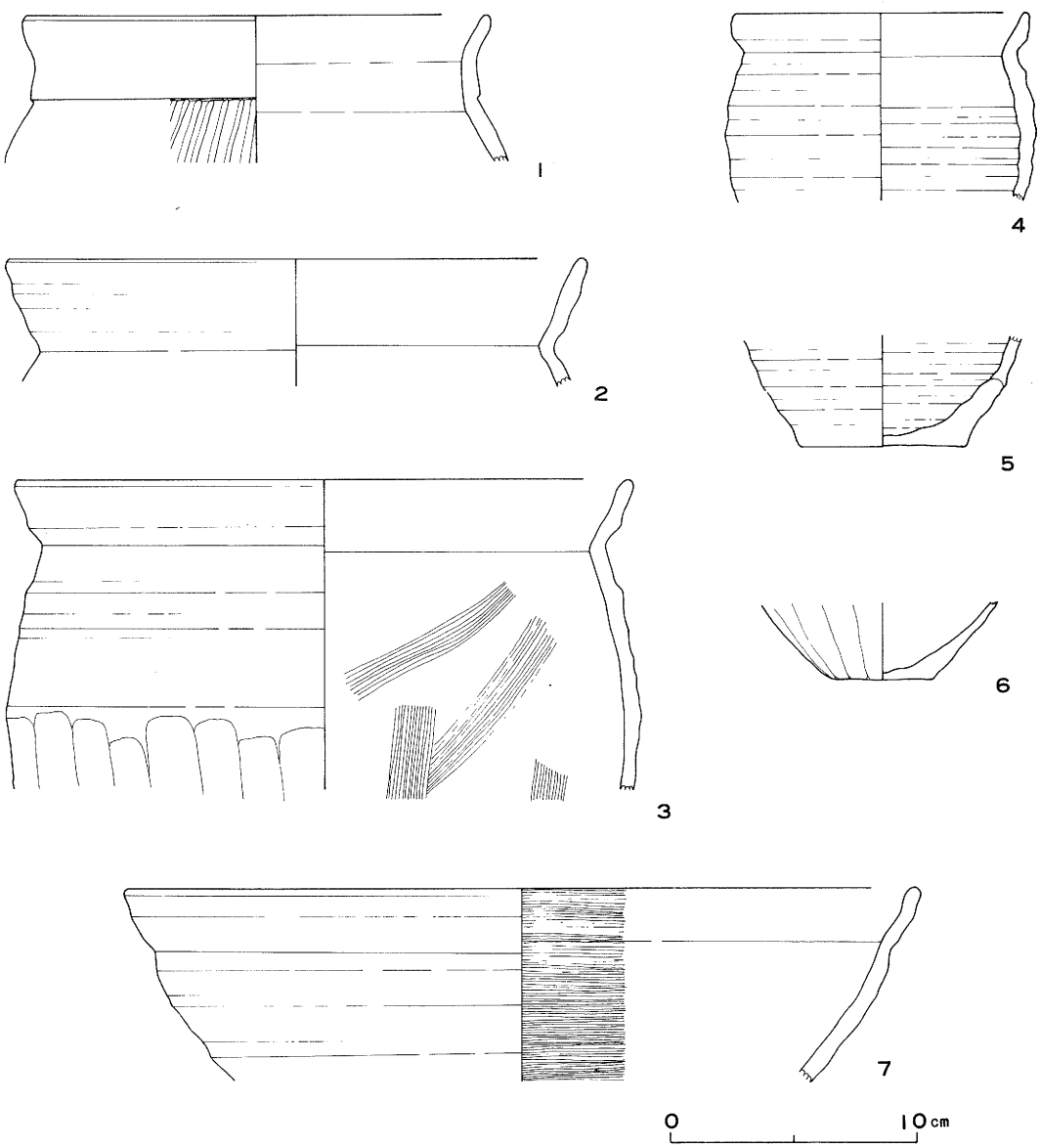
口縁部破片では4個体が確認された。1～3ともに⅓程度の口縁部破片である。1は直立する頸部から口縁部中ほどにいたって外反し、肩の張りの弱い器形をもつ。推定口縁部径は190㎜。ロクロ回転による成形をおこなうが、口縁部内外ともに簡単なヨコナデをおこない、外面頸部以下をヘラ削りしている。ヘラ削りは横方向におこなわれ、5㎜間隔に刻目が入る。厚い削りがおこなわれているために頸部に段がつく。このヘラ削りは全体を知り得ないがおそらく肩部にかけておこなわれているのであろう。焼成、胎土は良好で、赤味がかった褐色である。2は口縁部の外反する「く」の字状の頸部をもつ土器である。推定口径236㎜。成形はロクロ回転によるが、口縁部内外をていねいなヨコナデをおこなっている。胎土は緻密であるが焼成は弱い。赤褐色を呈す。3は口縁部の外反する「く」の字状の頸部をもつ土器である。推定口径251㎜。肩部は弱く張り、内湾しながら底部に移行する器形をもつ。最大径を口縁部にもつ。成形はロクロ回転によるが、口縁部から頸部にかけてヨコナデ整形をおこない、外面肩部以下をヘラ削りしている。内面の部分的にハケ状工具により、ナデ整形もおこなわれている。胎土には砂粒を含むが焼成は良好で硬い。褐色を呈する。第2号住居址出土の甕形土器と器形、整形技法とも同じものである。4は小形の甕形土器の口縁部破片である。口縁部の外反する「く」の字状頸部をもつ最大径が同部にある土器である。口縁部径121㎜、胴部径127㎜を推定する。成形はロクロ回転によるが、内外面とも口縁部から頸部にかけてていねいなヨコナデ整形をおこなっている。胎土、焼成ともに普通で赤味がかった褐色の器面にススを付着する。5、6とも平底の底部破片である。5は底径68㎜を計るロクロ痕のはっきりとした土器である。胴部と底部との接合点が明瞭で、この接合点に強い曲線をもち胴部につづく。回転方向は右で、底部は回転糸切りによる切り離し底である。色調は明褐色で胎土には砂粒が多い。6は底部径が41㎜と小さく、いくぶん内湾しながら胴部へと向ってゆく。成形はロクロ回転によると思われるが、外面は胴部、底部ともにていねいなヘラ削りがおこなわれている。胴部におけるヘラ削りによる粒子の動きは胴部から底部に向けて移行している。内面は指頭による押えナデ整形によっている。色調は暗褐色で焼成は硬い。

甑形土器（7）

¼の口縁部破片1点だけの出土である。口縁部径325㎜を推定できる大形の土器である。胴部から口縁に向って直線的に外反して開くが頸部にいくぶんの曲線をもっている。成形はロクロ回転により、ロクロ痕を外面に明瞭に残す。内面は横方向へハケ状工具を用いてナデ整形をおこなっている。色調は褐色で胎土に砂粒を含みもろい。胴部がつぼまっている器形のためここでは一応甑形土器と分類したが、あるいは甕の口縁部破片であるのかもしれない。

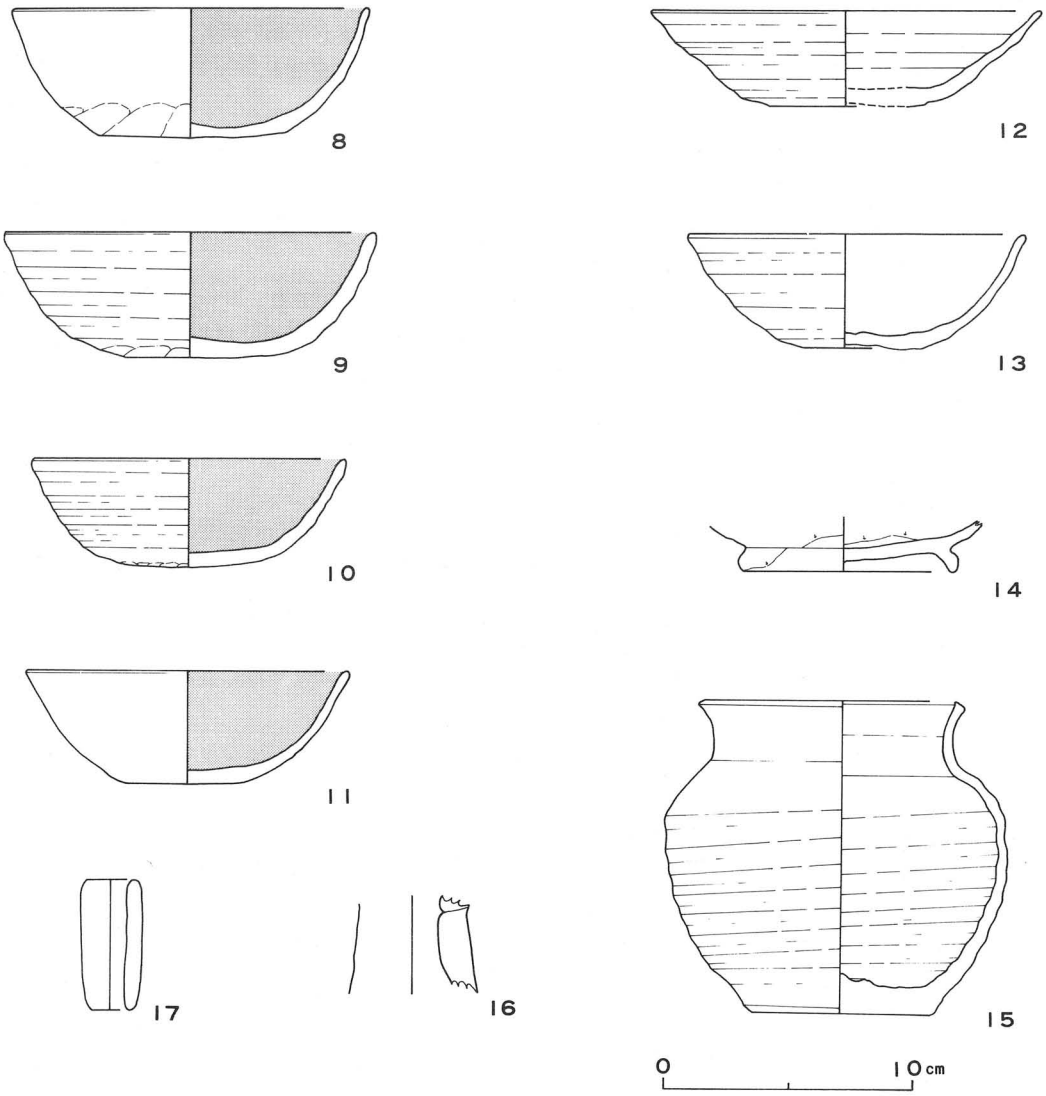
坏形土器（8～14）

8～11は土師器、12、13は須恵器、14は灰釉陶器である。8は口縁部径142㎜、器高51㎜、底部径74㎜・9は口縁部径146㎜、器高50㎜、底部径64㎜を計る。8、9とも成形、整形が共通の土器である。口縁部のいくぶん外反する、体部下半に曲線を強くする器形をもつ。成形はロクロ右回転によるが、口唇部から内面にかけてていねいなヘラ磨きをおこない内黒土器としている。底部は第2号住居址出土の回転糸切り底をもつ土師器坏と同様の遅い回転による糸切りをおこなったのち、底部から体部下端にかけて手もちヘラ削りをおこなっている。底部中央には糸切り痕を残す。9はロクロ痕を明瞭に残し器厚も厚い。色調はともに赤味がかった褐色で、胎土に砂粒を含み焼成温度も低い。10は口縁径125㎜、器高43㎜、底部径53㎜を



第８図　第１号住居址出土遺物(1)　（１：３）

計る。口縁部の外反する体部下半部に強い曲線をもつ器形である。成形はロクロ右回転によるが、口唇部から内面にかけてていねいなヘラ削りがおこなわれ、内黒土器となっている。外面にロクロ痕を残す。底部は回転糸切りによる切り離しののち、手もちヘラ削りをおこなっているためいくぶん丸みを帯びている。色調は赤味がかった褐色で胎土に砂粒を含み、焼成温度も高くはない。11は口縁部径129㎜、器高45㎜、底部径47㎜を計る。体部下半の曲線を強くし、そのまま外反する口縁をもつ。成形はロクロ右回転によるが、口唇部と内面はていねいなヘラ磨きをおこない、内黒土器としている。底部は回転糸切りによる切り離しであるが８、９の土器、あるいは第２号住居址出土の土師器坏の糸切りよりも切り離し時点でのロクロの回転は速い。色調は赤味がかった褐色で、胎土に砂粒を含み焼成温度も高くはない。12、13はロクロ左回転による成形で、ロクロ痕を明瞭に残し、底部は回転糸切りによる切り離しの須恵器である。12は⅓ほどの破片で口縁部径155㎜、器高38㎜、底部径61㎜を推定できる大形の坏である。底部から口縁部へと直線的



第９図　第１号住居址出土遺物(2)　（１：３）

に外反してゆし器形をもつ。13は口縁部径135㎜、器高45㎜、底部径47㎜を計る。体部下半の曲線を強くし、そのままいくぶん外反する口縁部へとつづく器形をもつ。12、13ともに色調は明灰色で、胎土に砂粒を多く含み焼成はもろい。14は灰釉高台付坏で口縁部を欠損する。高台径は84㎜で高さは９㎜を計る。ロクロ回転で成形し、高台はロクロ回転で付けている。高台部断面は、外面のふくらむ形態をもつ。内外面とも淡緑色の灰釉がかけられ、外面は一部が高台にまでおよび、内面底部中央は釉が塗り残されている。内面底に焼成時の重ね痕が円形に明瞭に残っている。胎土は白色。

小形広口壺（15）

口縁部径106㎜、器高136㎜、底部径71㎜、胴部最大径136㎜を計る須恵器である。口縁部から肩部にかけての１部を欠損する。ほぼ直立する頸部から口縁部中ほどにいたって外反する口縁をもち、胴部中位で湾曲し底部へとつづく器形をもつ。成形はロクロ右回転による薄い器厚の土器であるが底部は極端に厚くなっている。胴部にロクロ痕を明瞭に残す。底部は回転糸切りによる切り離しである。胎土、焼成ともに良好な土器である。

浄瓶（16）

浄瓶の頸部破片と思われる。ロクロ回転による成形で胴部との接合痕が明瞭に残る。胴部との接合部分の径は43㎜で口縁に向って広がってゆく。胎土、焼成ともに良好で灰色を呈す。

土錘（17）

１点だけの出土で一部を欠損しているがほぼ完形品である。径24㎜、長さ52㎜を計り、中央に径12㎜の穴をもつ。焼成は悪い。（飯島繁夫、林　和男）

3．第２号住居址（第10図）

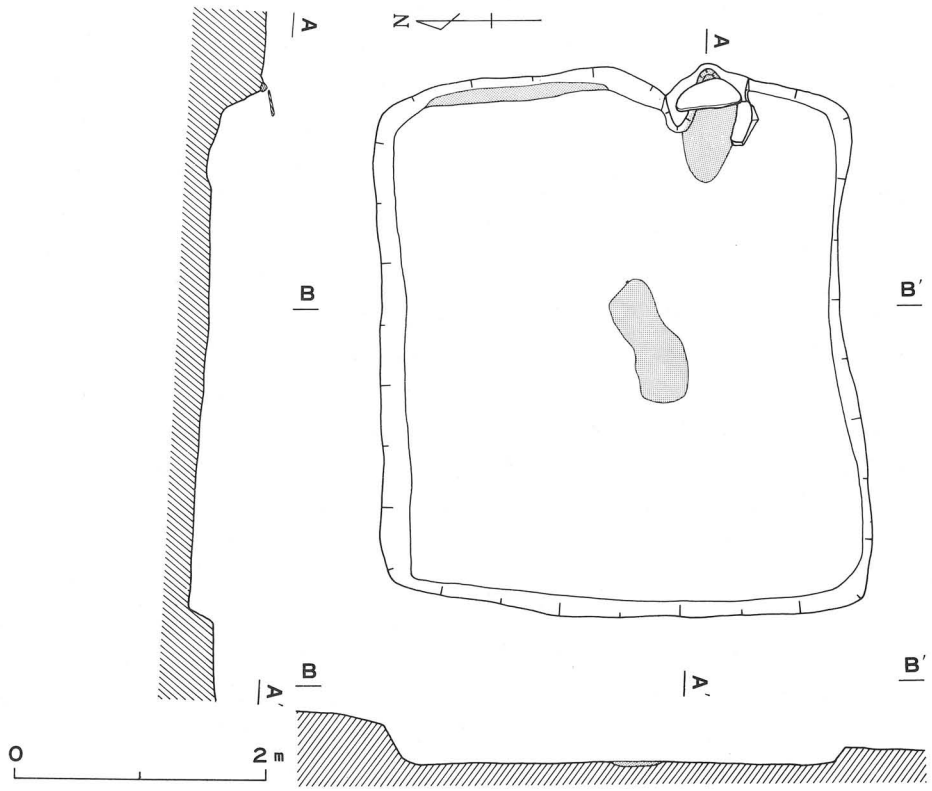
グリッドのＢラインをトレンチ試堀した際にＢ－８区に壁の一部が推定され、Ｂ－７～８区に礫群が検出されたために周囲を拡張してプランが得られたものである。拡張の範囲はＢ－７区を中心にして周囲20区を対象とした。また、畑全体に任意に選んだ地点につぼ堀りをおこなって遺構の検出をはかったが第２号住居の周囲には遺構は発見できなかった。

調査は層位ごとにおこなっていったが３層において、若干の地質の変化がみられたものの明確なプランは得られず、４層にいたって完全な方形のプランを得ることができた。

第２号住居址は第１号住居址の南西方向15ｍの所に位置する。平面形は東西440cm×南北385cmを計るわずかに隅の丸い方形を呈し、主軸方向はＥ－2°－Ｎとほぼ東西線に一致する。壁は70°ほどの角度をもち、北壁で30cm、南壁で10cmほどローム層を切り込んで作られている。

床は黒褐色土の混ったローム土を踏みかためてそれとしているが、軟弱で凹凸がみられる。とくに東南隅のカマドの南側付近は、地山を深く堀りくぼめ、その上に黒褐色土をかなり厚く踏みかためているが、中央部より５cmほど低くなっている。

住居址中央部の床面が100×40cmの不定形に焼け、表面に炭を乗せた厚い焼面となっている。また東壁のカマドの北側一帯が焼けており、焼土の一部が床面にまで及んでいた。柱穴、周溝等は十分な精査をおこ



第10図　第２号住居址実測図　（１：60）

なったにもかかわらず、壁内外ともに全く検出されなかった。

カマドは東壁の中央ほぼ南寄りに構築されていた。保存状態は良好であった。カマドの規模は残存している状態で長さ60cm、巾75cmほどを計るが、灰原が床面に細長く35cmほど広がっているので袖は検出できた状態よりいくぶん長く張り出していたものと思われる。焚き口は35cmほどで、カマド中央部に支柱が残されていた。カマド内床、側壁ともに厚い焼土となっていた。袖は石を芯に粘土でおおって作られ、天井は一枚の割り石を芯としていたが回りの粘土はくずれおちてしまっていた。煙道は黒色土層（II層）中に設けられていたため検出することができなかった。

遺物は東壁付近で耳皿が一点出土したほかは、土師器の坏、甕等がカマド内およびカマド付近の床面に集中して出土した。

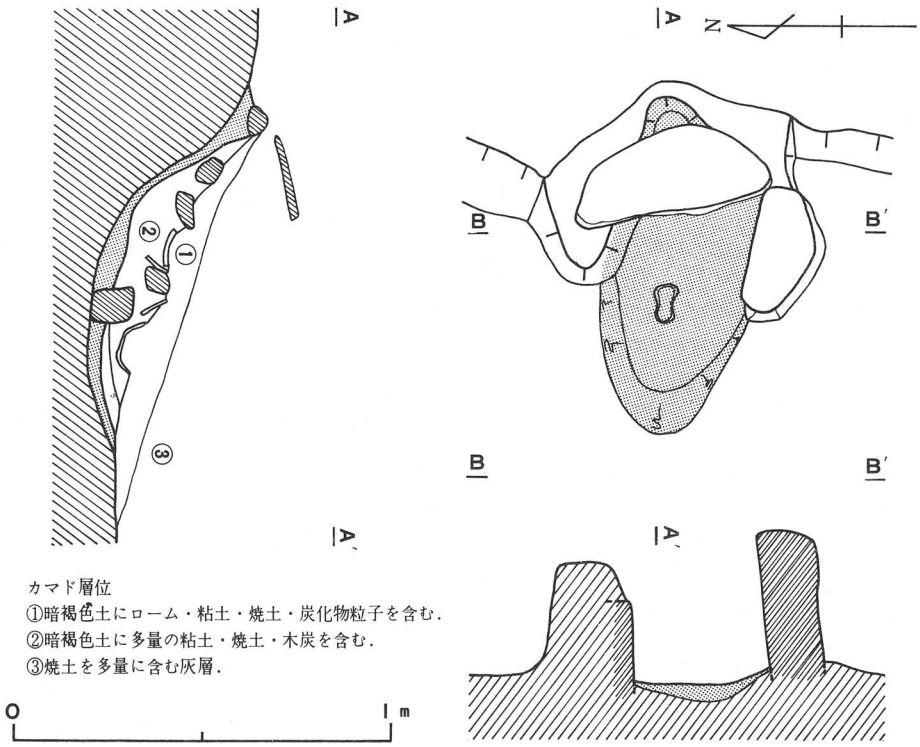
トレンチ試掘の際に住居址と重複して検出された礫群は住居址内東南4半分に広がっていた。礫は20cm大以上の大きなものは50cm大ほどもあるものが2、30個重なっていた。この礫のいずれもが熱を受けていた。調査過程で住居址との関連も考えたが、床面より5～60cmほど浮いている。明らかに床面上の層位とは異なる黒色土中に含まれている。礫に火を受けた痕跡が認められるが包含層に焼土、木炭等が含まれておらず。この場所で火を受けたとは考えられないとの理由により、住居址とは直接関係のないものと考えた。この層位から施釉陶器の底部が1点出土した。（坂口益次）

4．2号住居址出土遺物（第12・13図）

住居址の覆土中、床面上より、土師器、須恵器、縄文土器、貝等が出土しているが量的には少なく、また、図示できるものも7点と多くはない。

甕形土器（1～3）

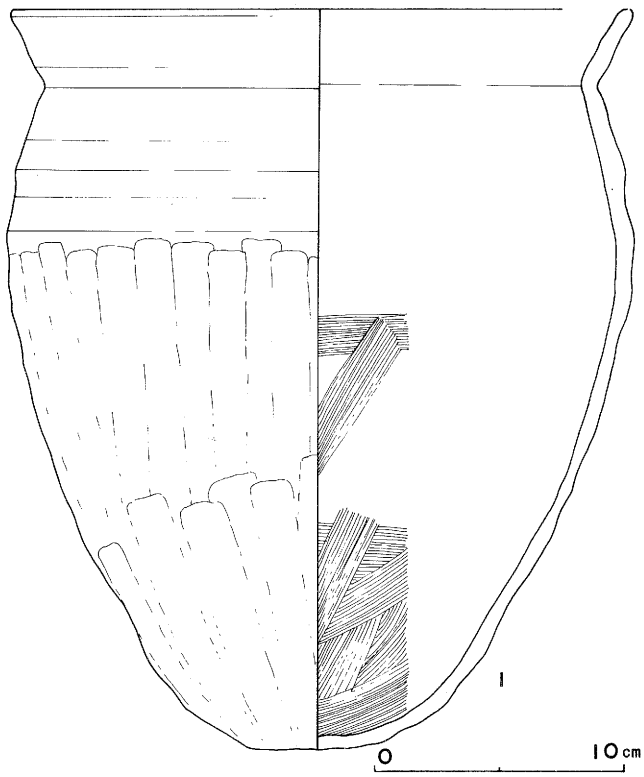
1は¼ほどを欠損する。口径248mm、器高297mm、最大巾を胴部にもち径252mmを計る。「く」の字状の頸部から外反する口縁をもつ。胴部上半に曲線を強くして、ゆるく内湾しながら底部へとつづく器形をもつ、



第11図　第2号住居址カマド実測図　（1：20）

底部は丸底を呈する。整形は内外面ともロクロ回転によるナデをおこない、口縁部についねいなヨコナデがおこなわれている。外面は肩部から庭部にかけてタテのヘラけずりがおこなわれ、内面は底部付近をハケによるナデ整形がなされている。器厚は口唇から肩部にかけては厚いが、以下はそれより薄くなっていて全体に凹凸がはげしい。

2は⅓ほどを欠損する。口径258㎜、器高302㎜最大巾を胴部にもち304㎜を推定できる。口縁部は外反する。頸部は1よりもいくぶんゆるい「く」の字状を呈し、胴上半に曲線を強くしそのままゆるく内湾して底部へとつづく器形をもつ。底部は欠損しているが、底のいくぶん丸みを帯びる平底を呈するものと思われる。整形は内外面ともロクロ回転によるナデをおこない、口縁から肩部にかけてていねいなヨコナデがおこなわれている。外面は肩部から底部にかけてタテ方向のヘラ削りがおこなわれ、内面は肩部以下底部にかけてハケ状工具によるナデ整形がおこなわれている。器厚は胴部中央付近が薄くなるほかは10㎜前後と厚い。器面全体に凹凸がはげしい。

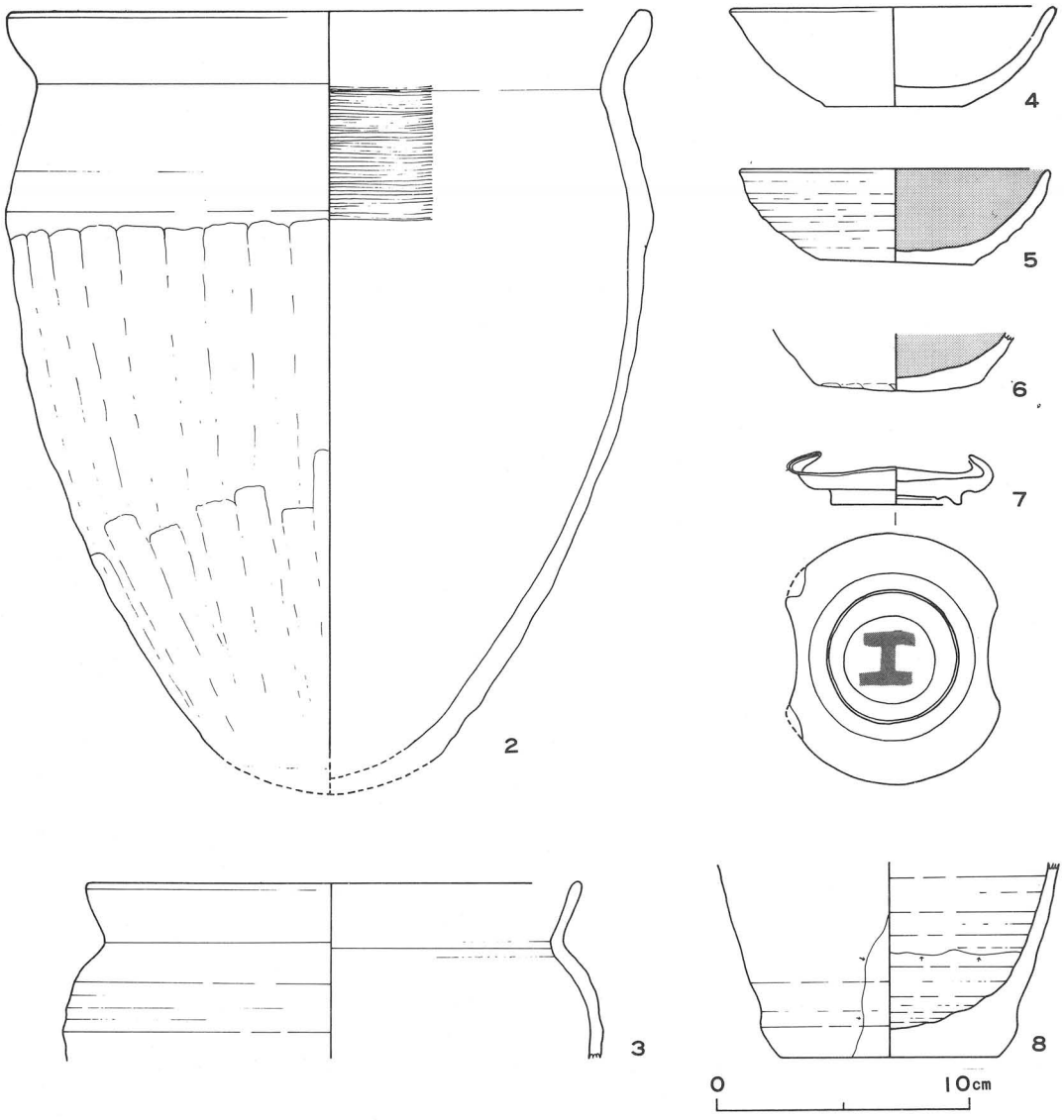


第12図　第2号住居址出土遺物(1)　（1：3）

1、2とも成形は巻き上げ手法による。また胎土は砂粒を含み焼成ももろい。前記の2個体は、「く」の字状頸部をもつ、口縁部のていねいな横ナデ整形、外面肩部以下底部にかけてのヘラ削り（粒子の動きは底部から肩部方向に向ってみられる。）、内面のハケ状工具による整形と製作手法が同じである。3は口縁部破片でⅢ層から出土したものである。外反する口縁をもち、「く」の字状の頸部から肩のはる器形をもつ。整形はロクロを使ったナデ整形がおこなわれ、口縁部の内外面にヨコナデ整形をおこない内面はそれが肩部にまでおよんでいる。胎土は良好で焼成も良い。

坏形土器（4～6）

4は口縁部径130㎜、器高40㎜、底部径55㎜を計る。口縁部の外反する胴部下半部に曲線を強くして底部にいたる器形をもつ。成形はロクロ右回転により、口唇部から内面をていねいなヘラ磨きがなされている。色調は内外面とも赤みがかった褐色をなす。5は口縁部径124㎜、器高37㎜、底部径60㎜を計る。口縁部のいくぶん外反する胴部上下部に曲線を強くして底部にいたる器形をもつ。ロクロ右回転による成形で、口唇部か内面をていねいなヘラ磨きをおこない内面黒色土器とする。外面は褐色。前記2点とも底部は回転糸切りによる切りはなし底であるが、切りはなし時点でのロクロの回転が遅いためか糸切り痕の間隔の広い雑な切り口となっている。6は口縁部を欠損しているが、底部径を66㎜計り、胴部下半に曲線を強くしそのままいくぶん外反する口縁部へとつづく器形をもつものと思われる。ロクロ右回転の成形で、口唇部から内面をていねいなヘラ磨きをおこない内面に炭素を付着させ内黒土器としている。底部は全面手もちヘラ削りがおこなわれているため、いくぶん丸みをおびた底部となっている。ヘラ削りが庭部全面におよんでいるため切りはなし痕を観察することはできないが、成形手法が1号住居址出土の土師器坏と同であるためやはり回転のゆるい糸切りであろうと思われる。3点ともに胎土に砂粒を含む、焼成温度のひくい土器である。



第13図　第２号住居址出土遺物(2)　（１：３）

耳皿（７）

口縁部径100㎜、器高15㎜、高台径52㎜を計る口縁部径と高台径の比率が10:5.2を示す皿形土器の相対する口縁部を折り曲げた須恵器耳皿である。皿の器体はほぼ垂平に開き、底部は回転糸切り底に高さ５㎜ほどの高台をロクロによる回転付けをしている。内面及び外面の一部に自然釉がかかり、色調は灰色をなす。胎土は緻密で焼成は硬質である。底部に耳部を左右にすると「工」の墨書がある。

壺形土器（８）

２号住居址覆土中の礫群から出土した底部片である。胴部はいくぶん内湾ぎみに底部につづき、底部直前でふくらみをもっ器形をもつが器形全体は知り得ない。底部径を84㎜計り器厚は厚い。底部は回転糸切りによる切りはなしである。胎土は緻密で焼成も硬い。外面および内面底部に黒色の釉がかけられており外面の一部はコバルトブルーに変色している。（飯島繁夫、林　和男）

Ⅳ 遺構と遺物の検討

1. 住居址

本遺跡発見の動機となった第1号住居址は、その全容を把握するには至らなかったが、その規模は平地におけるそれとほぼ同様で、むしろ通常のあり方を示しているといえよう。

第2号住居址で検出された礫群は前述したように直接住居址に伴うものではなく、廃絶後、ある一定時間経過した後にそのくぼ地に投棄されたものであろう。しかし、この礫群は菅平高原において産する礫とはいえ、いずれも20cm大以上、大きなものは50cm大ほどもあり、そのすべてが火を受けていて、また、遺跡周辺の火山灰土中には数多く存在しないことから直接にはこの住居址にはかかわらなくとも、たとえば周辺の住居址のカマドを構成していた石をその廃絶に際して投棄したものであるといったような何らかの意味があるのではないかと思われる。

2. 出土遺物

本遺跡出土遺物は1号住居址が甕、こしき、坏（須恵器2、土師器4、灰釉1）、小形広口壺の組み合わせで須恵器の比重が大きいのにくらべ、2号住居址出土のものは甕、坏、耳皿の組み合わせで耳皿の須恵器以外はすべて土師器である。1号住居址が住宅建築のためにかなりの攪乱を受けていたとしてもその両者の相異はきわだっているといえる。

甕形土器は1号住居址および、2号住居址出土のものは共に頸部が「く」の字状を呈する口縁径と胴部最大径がほぼ等しくなる器形をもち、巻上げロクロ成形ののち胴部下半をヘラ削り整形する土器で同じ成形の区別のつきにくい器形であるが、1号住居址では前記のものが主体ではあるが小数、ロクロ痕の明瞭なもの6、小形で底部にていねいなヘラ削りを施しているもの5、小形甕4もみられ、量的にも出土数が多い。「く」の字状頸部をもつ甕の類似の資料は岡田正彦氏によって詳しいが（岡田1970）菅平高原をとりまく地域のこの時期においても普遍的にみられている(註1)。 4の小形甕は長野市県町遺跡（笹沢1976）、屋代大塚遺跡（岡田1970）などに出土がみられ「灰釉陶器や内面黒色研磨の土師器を共伴する」(岡田1970)といわれているものである。1号住居址から出土した直行する頸部から外反する口縁をもつ甕形土器1は、各遺跡から若干の出土がみられているもので、その中心を佐久地方に求めることのできるものである(註2)。

坏形土器は両住居址出土のものはすべて右方向のロクロ成形で回転糸切りによる切りはなし手法をもつものであるが、1号住居址と2号住居址出土のものには大きな相異がみとめられる。1号住居址出土の土師器坏はそのすべてが内黒土器であり、器高が50mm前後で口縁部径が140mm以上の大形のものと器高44mm前後で口縁部径が130mm以下の小形のものとが各2点づつ出土している。底部を回転糸切りによる切りはなし底を有する小形の坏1点を除く3点が、底部を回転糸切りののち手もちヘラ削りによる整形が加えられている。また大形の2点はそのヘラ削りが胴下端部にまでおよんでいる。伴出する須恵器坏は2点ともに回転糸切りによる切りはなし底をもつ、焼成のあまり良くない土器である。1号住居址出土の回転糸切りののち手もちヘラ削り整形を加えた底部をもつ坏はセットとしての良好な類例は知られていないが(註3)信濃国分寺跡（斉藤1974）、城の前遺跡（小林1975）(註4)、更埴市五十里川北部地域第313地点(玉口1968)、大塚遺跡（岡田1970）等で少数出土しているほか、佐久市儘田遺跡（矢口他1971）H－2号住居址において回転糸切り底をもつ須恵器坏を伴出し、生仁遺跡（下平他1969）H－15号住居址にあっては回転糸切り底をもつ須恵器坏に土師器高台付の坏、皿形土器、塊の各器形が伴出している。2号住居址では3点の土師器坏が出土している。床面上から出土した2点は器高40mm以下の小形の坏で、回転糸切りによる切りはなし底をもつ。またそのうちの1点は内面にヘラ磨きはなされているが内黒手法をとっていない。灰釉陶器坏は今回の出土以外は菅平高原での出土遺跡は知られていないが、この周辺地域からは上小地方だけでも真田町藤沢遺跡（川上1975）、東部町赤石B遺跡、原田遺跡、桜井戸遺跡（藤森他1970）、城の前遺跡（小林1975）、長門町片羽遺跡（中村他1976）、上田市枠木遺跡（川上他1970）、太田遺跡（小林他1975）等かなり

普遍的に出土している。(註5)

耳皿の出土は岡田正彦氏によれば県下での発見例は少なく、東北信地方では屋代大塚遺跡2点、上山田町御屋敷遺跡1点、上田市中塩田五加遺跡1点を数えられるにすぎないという(註6)。このうち大塚遺跡出土の1点は灰釉陶器、五加遺跡出土のものが須恵器で他は土師器のものであり、類例は五加遺跡のものだけとなる。2号住居址出土の耳皿は緻密な作りのものでかなりの優品といえる。また底部に付されている「工」と書かれた墨書は文字の隅の角くばった文字で、この時期に一般にみられる筆をもちいて書かれたものとは異質のものである。

年代決定の有力な方法として最も普遍的に出土し、しかも、その製作、使用した人間集団の変化を最もよく反映しているものとして土器をとりあげ、それを年代別、地域別に編年することによって時間の物差しとする方法がとられ、この出土遺物の年代をもっておおむねその遺構の年代を推定している。それには器形の組み合わせによる変化、あるいは限定された時期に製作使用された特定の遺物の伴出関係(土彩、施釉陶器など)にもよるが、とりわけ一つの器形を取りあげて、それを技術的な、あるいは層位的な伴出関係の一つの系統として把握する方法がとられ(田中1967、桑原1974)それらを総合的に体系づけている。奈良時代から平安時代にかけての土器の編年は比較的絶対年代のとらえやすい須恵器を中心として、これに伴出する他の遺物を対比させることによって、それぞれの遺物に関する年代を得てきた。

それでは山本畑遺跡出土遺物の年代を推定すればいつごろに比定できるであろうか。各時代を通じて土器組成の主体を占めている甕形土器あるいは坏形土器が年代決定の資料としてとりあげて見てみたい と思う。

山本畑遺跡出土の甕形土器は1号住居址出土のものに器形、整形手法に多少の変化がみられたものの、2号住居址のものと明確に区別することはむずかしい。周辺地域の資料によると類似の甕形土器の年代は8世紀末から11世紀にかけて位置づけられている。(岡田1970)坏形土器は両住居址出土のものにそれぞれその器径比、整形手法に大きな変化がみられ、そこに時間の推移が想定される。一般に甕形土器とくらべて坏形土器のほうが器径比、成形手法などにこまかな変化が現われやすい。そして、その変化は製作技術の発展の結果によると考えられている。(笹沢1976、桑原1974)

1号住居址出土の回転糸切り後に手もちヘラ削り底をもつ坏形土器は生仁H－15号住居址で出土している。ここでは、住居址内出土土器の器形の組み合わせ、製作技法の面でバラエティに富んでいることから灰釉陶器を伴う一群の土器よりも前出するものであろうと報告者は述べている。(下平1969)

本遺跡1号住居址出土の土師器坏の全てが内面研磨の内黒土器である。土師器坏の全てが内面研磨の内黒土器をもつ資料に大塚遺跡(岡田1970)、八幡青木遺跡(岡田1972)が報告されている。岡田正彦氏はこれらの報告の中で、100%の内面研磨黒色土器をもつものは畿内の黒色土器第2期10世紀末～11世紀前半(田中1976)の影響を受けているとして、それよりも時間的に下がると推定し、11世紀前半をそれにあてている。笹沢氏は上水内郡誌の中で、ロクロを使用して生産された土師器を善光寺平第五様式と分類している。その中で氏は、坏の器高が40㎜以上で糸切り底の須恵器を伴出するものを第五様式古とし、坏の器高が40㎜に達するものが少なく、須恵器坏との伴出のなくなる時期を第五様式中と分類して、それぞれの年代を第五様式古は8世紀末から10世紀、第五様式中は11世紀の年代をそれぞれあたえている。

平出遺跡(大場他1955)においては、坏形土器を底部糸切りの土師坏の出現に施釉陶器の伴出するものを第5様式以降に分類し、第5様式を内面黒漆色のもの、第6様式を内面黒色漆色のなくなるもの、第7様式を器形が皿形を呈するもののみとして、第7様式を11世紀頃と推定している。また、1号住居址出土の灰釉陶器は東濃糸の窯で焼かれた折戸53号窯式と編年されているもので(註7)、楢崎氏(楢崎1968)によると平安末期11世期から12世紀のはじめに位置づけられている。

これらを総合してみると、本遺跡を8世紀末から11世紀にかけて位置づけるのが妥当と思われる。また、1号住居址と2号住居址の関係はその出土遺物に若干の相異がみられる。そして、それは時間の差によるものと理解される。(林　和男)

V 総　括

菅平を象徴する四阿山（2,333m）は、根子岳（2,195m）と共に、春3～4月頃になると周囲の山々がすっかり雪が消え暖かさが増してくるのと対照的に、くっきりと白い峰をうかびだたせる。下界からは、いかにも印象的な風景である。ここに古代人は神を仰ぎ見るようになると思われるが、四阿山はさらに白山信仰と結びつき、水分の神として崇拝され、さらに四阿山を源とする神川（加賀川）は上田盆地一帯の水田をうるおしており、そこに農耕生産の神としてもあがめられるに至ったのである。

古代人の水に対する考え方がより切実となったのは、日本列島に水稲栽培が導入されたといわれる弥生時代からで、それ以後「水」は直接生産に結びつき豊かな稔りをもたらすものとして、人々にあがめられ水に対する崇拝、信仰がおこったものと思われる。

菅平陣の岩岩陰遺跡は、縄文時代早期から古墳時代までにわたる長期間の文化層が確認されているが、そのうちとくに豊富な弥生時代の遺物中に「銅釧」が検出されている。この時代における青銅器は、ある種の祭器と考えられるし、岩陰内にみられる湧水と結びつけて、弥生期には生活跡的要素と原始的な水源信仰に関連する一種の祭祀儀礼的なものが行われた場所ではないかとも考えられる。この他、大明神沢洞穴等沢すじの水源に近い地点などからも、この期の遺跡、遺物がみられるのである。

前述したように、菅平高原一帯からは奈良・平安時代の遺跡が少数ではあるが発見されている。しかし、その大多数はただ遺物の散布が確認された程度で、積極的に遺構との関連で把握されたものはなかった。今回、発掘調査を実施した山本畑遺跡は、その意味で遺構と遺物の共伴関係がつかめたので、大きな意義があると思われる。さらに、高冷地における該期文化の研究が、必ずしも進んでいるとはいえない現状では、今後の調査の足がかりとなり得るものと思われる。

ところで、本遺跡の性格について若干の考察を加えてみたい。

湿原に面する位置に構築された二つの住居址は、その一つは全容を把握するに至らなかったが、ほぼ同規模のものとみられ、平地におけるこの期の住居址とさほど異ったたちがいを見いだせるものではなかった。しかし、トレンチによる周辺の確認調査結果においては、そのまわりに同様な住居址遺構を発見するに至らなかった。あるいは、調査の行われなかった北側の山麓にその続きがあるのかもしれないが、少なくとも平地でみられるような集落として把えられるものではなく、もっと小規模なものといえよう。

前述したように、本遺跡は検出された土師器、須恵器等からみて、両住居址に若干の時間的な差があるかと思われるが、およそ8～11世紀代に比定されるものであることが把握できた。

その中でも、第1号住居址内から検出された遺物中に浄瓶(？)破片と第2号住居址内遺物中に須恵器耳皿の資料がみえることに、とくに注目したい。浄瓶はその形態は細形の長頸壺であるが、多分に宗教的色彩の強い資料である。長野県内からは、この種の出土例は意外と少なく、かって調査の行われた塩尻市高出遺跡にその報告があるぐらいである。あるいは特殊な形態のため見落しているのかもしれない。また、耳皿はその底部に「工」の墨書がみられるものである。この墨書はその筆法からみて、毛筆によるものではなく、むしろヘラ状の木製具で書かれた可能性が強いが、この文字は見方によっては⛩（鳥居のマーク）にもみられる資料でもある。住居址内におけるこれらの資料は、むしろ特殊な性格を帯びたものと考えられ、本住居址そのものも通常の生活住居というより、多分に祭祀的色彩を強く感じさせる遺構といえよう。とすれば、本遺跡はその立地からして、菅の密生地である湿原の、あるいは神ながる「神田」にのぞむ祭祀地点として、更にこの時期における神川水系の水源祭祀としての一種のオタマヤ的性格をもった遺構かもしれないとの見方もできるかもしれない。

ところで、記紀・風土記などの古代文献にみられる「国見」・「歌垣」は、今日「花見」・「山遊び」・「山

行」などの名で呼ばれている「春山入り」の民俗行事あるいは民間・宮廷における儀礼の名称であるが、この「春山入り」の行事は、春の予祝行事として、8世紀以前には通有に行われたものといわれている。その起源は、やはり生産に必要な「水」に対する信仰からきたものと思われるのである。この「春山入り」の行われる山は、人々の生活資源の供給地でもあり、また水源を司るものとして、特定の高山が信仰の中心として崇拝されるようになったものと思われるのである。人々は山頂近くの水源に立って、山をたたえ、豊かな稔りをもたらす「水」に対して感謝と祈りをこめた「まつり」を行ったといわれる。

本遺跡は、こうした観点よりアプローチすることもできるし、さらに前述したように古道との関連でとらえられる遺跡かとも考えられるし、なお多くの問題を内蔵しているといえる。

いずれにしても、菅平高原におけるこの期の調査は、本遺跡調査によってその足がかりをつけたということで、現時点では問題を提起するにとどめ、今後の調査研究に待ちたいと思う。(川上　元)

註1　類似の資料は、更埴市城ノ内遺跡(岩崎他1961)、生仁遺跡、屋代大塚遺跡の一連の遺跡、その千曲川対岸の八幡青木遺跡、長野市浅川西条遺跡(矢口他1975)、戸倉町巾田遺跡(森嶋他1967)、上田市桝木遺跡、西光坊遺跡(小林他1973)、東部町原田遺跡、城の前遺跡などにみられ、菅平高原を中心として千曲川に沿った地域のこの時期の標準的な器形といえる。

註2　佐久市野沢儘田遺跡(矢口他1971)、新子田戸坂遺跡(竹内他1972)出土の甕形土器がこれで、埼玉県で「コの字状口縁」といわれているものに近いものであろう。また、高橋一夫氏は「くの字状口縁」をもつものより後出のものと分類されている。(高橋1975)

註3　昨年12月、上田市教委によって信濃国分寺尼寺南側の明神前遺跡がごく一部発掘調査された。遺構としては完全な住居址プランが確認できなかったが、カマドをもつ住居址が1軒検出された。ここでは、回転ヘラ切り底をもつ須恵器坏に底部切りはなし痕が完全に消えてしまっているほどていねいな手もちヘラ削りがおこなわれている土師器坏が伴出しており、良好な土器のセットとしてとらえられている。現在、川上元氏により整理が進められている。

註4　他遺物との伴出状態はH－20号を例にとると、「台付腕形土器・台付坏形土器・甕形土器、須恵器の大型甕形土器、灰釉の台付坏形陶器」などとなっている。なお、この報文の内容に若干ふれると、弥生時代Y－1号住居址と重なり合っている土師器(鬼高期)の住居址との関係について「同じプラン(弥生時代の住居址)の遺構の中に土師期の石組かまどがあり」「石組のかまどの中に完形の坏形土器が検出され」「完形の弥生式土器のセットが検出されたのは通常土師器のセットが検出される焚口であった」ために「弥生期の遺構が埋設した後に、偶然にほぼ同じ直上に土師期の住居址が構築され、たまたま出土した弥生式土器のセットを土師期の人たちが利用していた」ものと考察されている。これについての私見は差しひかえるが、報文全体がこのように氏のいわれる住居址内出土遺物はすべて同時使用とみなしているため氏の分類される真間期(この報文はいっさい型式分類の基準が示されておらず、しかも、坏形土器以外の器形の土器は出土遺構が記載されてなく、ただ氏による和泉期・鬼高期・真間期・国分期との分類によって分けられている。)の時期にロクロ成形の回転糸切り底をもつ土師器坏が含まれ、国分期に土師器のヘラ磨き整形による高坏形土器もセットの一部を形成するということになる。この遺跡は古墳時代から平安時代にかけての重要な遺跡でもあり、今一度検討を加えなければいけない遺跡である。

註5　楢崎彰一氏(1968)によると長野・佐久地方での灰釉陶器出土遺跡数は計28遺跡となっているが、その後の資料の増加でその数は倍増している。上小地方のこの時期のすべての集落址から灰釉陶器が出土しているといっても過言ではない。

註6　岡田正彦氏は耳皿形土器を現在も伊勢神宮の祭器中にあること、出土例の少ないことから「祭器的な性格をもつものであり」それゆえ、耳皿形土器を出土した住居址を「当時の祭祀に何らかの関係をした人々の住居址」であろうと想定されている。山本畑遺跡は標高1,240mの高原地帯で、しかも、古道の道すじに位置

しているという特殊性から考えてもその想定を支持したい。

註7　この灰釉陶器は上小地方に普遍的に出土しているもので、類似の東部町桜井戸遺跡（藤森他1970）出土の資料を報告者の佐藤氏によると、「楢崎彰一氏の教示によって東濃系折戸53号窯式のもの」であるとのことなのでこれに従った。

参　考　文　献

岩崎卓也　『城ノ内』更埴市教育委員会（1967年）

〃　『下条・灰塚』考古学資料刊行会（1971年）

大場磐雄他　『平出』平出遺跡調査会（1955年）

岡田正彦　「長野県更埴市屋代大塚遺跡調査報告」信濃22－4（1970年）

〃　「更埴市大字八幡青木遺跡発掘調査報告」長野県考古学会誌14号（1972年）

川上　元他　「枠木遺跡緊急発掘調査報告書」信濃22－8（1970年）

〃　「上田市上平遺跡緊急発掘調査報告書」長野県考古学会誌8号（1970年）

〃　『雁石・藤沢』真田町教育委員会（1975年）

桑原滋郎他　「多賀城周辺における古代坏形土器の変遷」多賀城調査研究所紀要Ⅰ（1974年）

小林幹男他　「長野県上田市西光坊遺跡緊急発掘調査報告」長野県考古学会誌15号（1973年）

〃　「太田遺跡緊急発掘調査報告書」上田市教育委員会（1975年）

〃　「城の前遺跡緊急発掘調査報告書」東部町教育委員会（1975年）

斎藤　忠他　『信濃国分寺－本編－』上田市教育委員会（1974年）

笹沢　浩他　『上水内郡誌歴史編』土師器・須恵器関係（1976年）

森嶋　稔他　『生仁』長野県考古学研究報告書7（1969年）

高橋一夫　「国分期土器の細分・編年試論」埼玉考古13・14号（1975年）

竹内　恒他　「佐久市新子田戸遺跡緊急発掘調査報告」長野県考古学会誌16号（1972年）

田中　琢　「古代・中世における手工業の発達－窯業畿内－」日本の考古学Ⅵ（1967年）

玉口時雄他　『更埴市条里遺構の研究』長野県教育委員会（1968年）

中村龍雄他　『片羽遺跡』長門町教育委員会（1976年）

楢崎彰一　「瓷器の道(1)」名古屋大学文学部二十周年記念論集（1968年）

藤森栄一他　『信越本線滋野～大屋間複線化工事事業地内埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』長野県教育委員会（1970年）

森嶋　稔他　「長野県埴科郡戸倉町市田遺跡調査報告」信濃19－3（1967年）

矢口忠良他　「長野県佐久市野沢平儘田遺跡緊急発掘調査報告」長野県考古学会誌12号（1971年）

米山一政他　『浅川・西条』長野市教育委員会（1975年）

永峯光一他　「長野県唐沢岩陰」日本の洞穴遺跡（1967年）

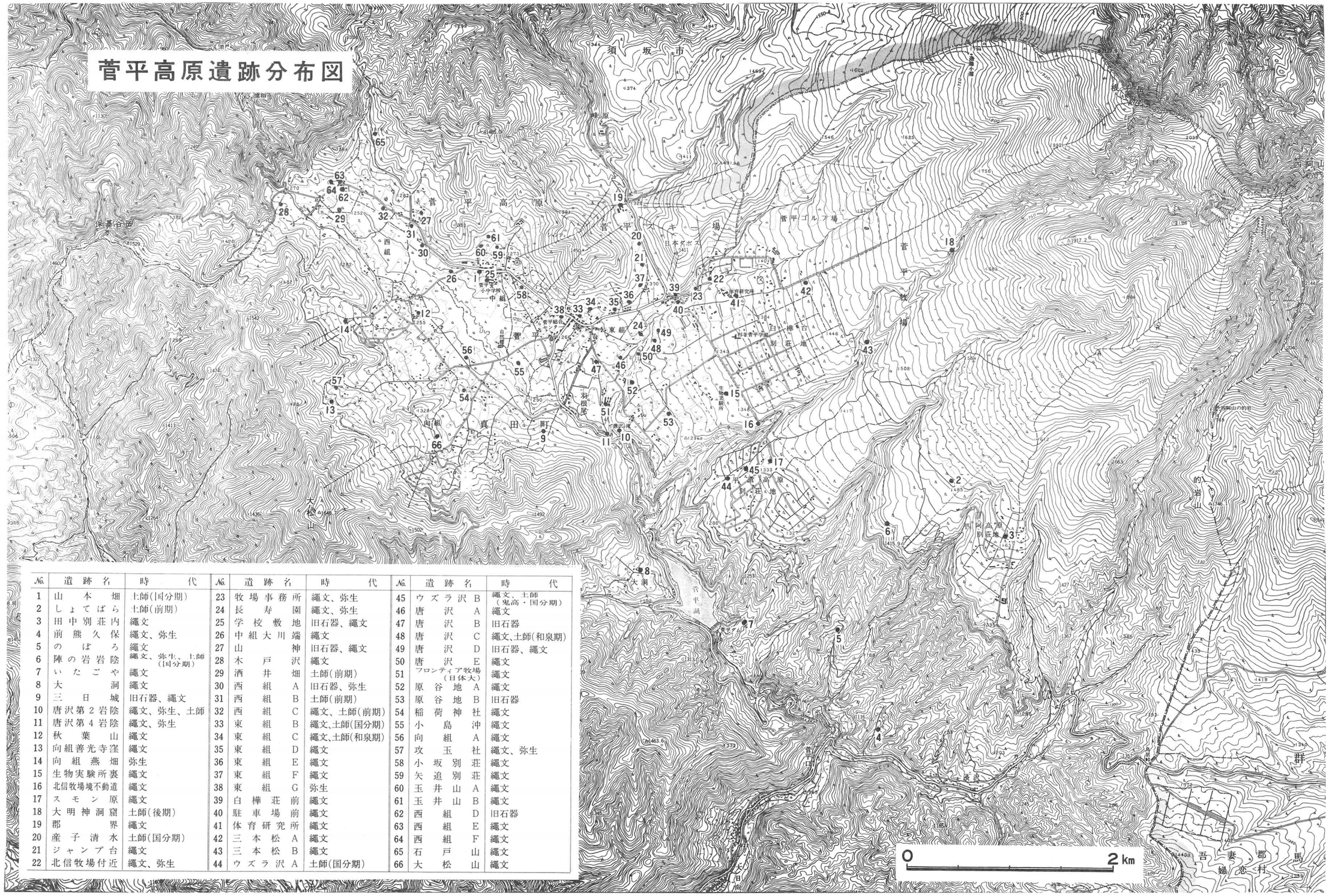
森嶋　稔他　「新産都市等開発地域内埋蔵文化財緊急分布調査報告書（真田町北部地区）」長野県教育委員会（1967年）

丸山敏一郎　「長野県菅平陣の岩岩陰遺跡調査概報」信濃20－5（1968年）

森嶋　稔他　『菅平の古代文化』菅平研究会叢書5（1970年）

藤沢宗平他　「塩尻市高出遺跡とその周辺」長野県考古学研究報告書1（1966年）

菅平高原遺跡分布図



No.	遺跡名	時代
1	山本畑	土師(国分期)
2	しょてばら	土師(前期)
3	田中別荘内	縄文
4	前熊久保	縄文、弥生
5	のばろ	縄文
6	陣の岩岩陰	縄文、弥生、土師(国分期)
7	いたごや	縄文
8	大洞	縄文
9	三日城	旧石器、縄文
10	唐沢第2岩陰	縄文、弥生、土師
11	唐沢第4岩陰	縄文、弥生
12	秋葉山	縄文
13	向組善光寺窪	縄文
14	向組燕畑	弥生
15	生物実験所裏	縄文
16	北信牧場境不動道	縄文
17	スモン原	縄文
18	大明神洞窟	土師(後期)
19	郡界	縄文
20	産子清水	土師(国分期)
21	ジャンプ台	縄文
22	北信牧場付近	縄文、弥生
23	牧場事務所	縄文、弥生
24	長寿園	縄文、弥生
25	学校敷地	旧石器、縄文
26	中組大川端	縄文
27	山神	旧石器、縄文
28	木戸沢	縄文
29	酒井畑	土師(前期)
30	西組A	旧石器、弥生
31	西組B	土師(前期)
32	西組C	縄文、土師(前期)
33	東組B	縄文、土師(国分期)
34	東組C	縄文、土師(和泉期)
35	東組D	縄文
36	東組E	縄文
37	東組F	縄文
38	東組G	弥生
39	白樺荘前	縄文
40	駐車場前	縄文
41	体育研究所	縄文
42	三本松A	縄文
43	三本松B	縄文
44	ウズラ沢A	土師(国分期)
45	ウズラ沢B	縄文、土師(鬼高・国分期)
46	唐沢A	縄文
47	唐沢B	旧石器
48	唐沢C	縄文、土師(和泉期)
49	唐沢D	旧石器、縄文
50	唐沢E	縄文
51	フロンティア牧場(日体大)	縄文
52	原谷地A	縄文
53	原谷地B	旧石器
54	稲荷神社	縄文
55	小島沖	縄文
56	向組A	縄文
57	攻玉社	縄文、弥生
58	小坂別荘	縄文
59	矢追別荘	縄文
60	玉井山A	縄文
61	玉井山B	縄文
62	西組D	旧石器
63	西組E	縄文
64	西組F	縄文
65	石戸山	縄文
66	大松山	縄文

あとがき

今回の発掘調査は山本両氏の全面的なご協力と、真田町教育委員会のご理解により、永久的に地下に埋もれずに菅平の古代史研究の一端になり得たことを感謝いたします。

1号住居址は住宅増築工事で破壊され一部しか確認できなかったが2号住居址は完全な形をみることができ、菅平において第1号の土師期住居址を確認できたことは菅平の古代史研究にとって重要な意味をもち、一応の成果があがったと考えられます。

発掘にあたっては、中学生の学習の一環として、大河内一樹校長をはじめ諸先生方のご協力を得て、野外学習として最後まで続けられたことに対して敬意を表します。また生徒にとっても一喜一憂しながらの発掘作業は生きた学習として有意義なことであったろうと嬉しく思います。

尚、第1次発掘にあたり塩田城跡発掘の多忙の中を黒坂周平氏にご教示いただいたことを心からお礼申し上げます。また真田町教育委員会の坂口芳雄、堀内精次両氏には、なにかとお世話になったことを付記して感謝申し上げます。

最後に、この発掘に参加した生徒諸君を記して感謝いたします。

（坂口益次）

発掘調査参加者

考古学クラブ	小島裕造(3)　松本規男(3)　松本久司(2)　村本周平(1)　伊東忠成(1)　宮原みか子(1)
理科クラブ	金井睦夫(3)　矢島剛(2)　宮崎猛雄(2)　大日向利明(1)　井沢秀仁(1)　水野洋(1)
1年生	加藤勉　川上与志伸　小島忠造　杉崎豊一　新井柳子　内田敦子　小山由美子 前沢恵美子　村本里美。
2年生	鹿島知幸　金井英幸　窪田真一　坂口基徳　竹村明義　政木孝　宮崎幸徳　山本富子 黒岩明美　小島いづ美　立花葉子　田中和枝　田中昌子　田辺和美　常田百合子。
3年生	田中隆博　常田清和　正木啓三　丸山秀和　宮崎健　宮崎政彦　宮原一弥 一之瀬充子　加藤ひとみ　坂口八重子　下条寿江　津端浩美　前田芳江　政木恵理子 柳沢涼子。

（順不同）

真田町文化財調査報告書

山本畑遺跡緊急発掘調査報告

昭和52年３月30日 印刷・発行

発行者 長野県小県郡
真田町教育委員会